

浜田市 茄立横穴出土資料について－金属器編－

仁木 聰・吉松 大志

はじめに

茄立横穴は浜田市三隅町三隅に所在する一穴の横穴墓である。1995（平成7）年11月、民家裏の急傾斜地の工事中に不時発見された。翌年3月に緊急調査が行われ、多数の人骨片や副葬品が出土した。本横穴と出土品の概要については（榎原・藤田2011）に報告されたが、横穴実測図と須恵器を中心とした出土状況図が掲載されたのみで、金属器を含むその他の豊富な出土品の図化や、学術的検討は課題として残されたままであった。

その後、島根県古代文化センターで2014（平成26）年度からテーマ研究「国家形成期の首長権と地域社会構造」が開始された。その研究事業の一環として、石見地域の横穴墓築造主体や社会構造を検討する素材として、本横穴出土品の再整理と金属器類の保存処理を実施し、さらに未報告資料の図化・検討を行うこととなった。

研究事業は2017（平成29）年度に終了し、翌年度末に研究論集報告書が刊行されたが、本横穴についての検討結果は紙幅の関係上、掲載がかなわなかった。そこで改めて本誌において主要な出土品である金属器について資料化するとともに、他遺跡出土資料と比較検討することで、本横穴の歴史的位置づけを行いたい。

なお執筆分担については、各章の末尾に記した。また全体の構成・編集は仁木が行い、掲載にかかる庶務は吉松が行った。（吉松）

1. 茄立横穴の地理的・歴史的環境（図1・図2）

三隅川は中国山地を源流とし、日本海に注ぐ2級河川である。三隅町三隅は三隅川河口域に位置するが、河口部にはかつて東側に砂丘を擁した小規模な潟湖が形成されていたと考えられる。

茄立横穴の位置する三隅川河口域は古代以前の遺跡が非常に少ない。旧石器・縄文時代に確実にさかのぼる遺跡は知られていない。弥生時代には上古市遺跡で弥生時代前期から後期の土器が出土しているが、遺構等は確認されていない。同じく、海石西遺跡でも弥生時代前期から中期後半の遺物が出土しているが、自然河道（弥生時

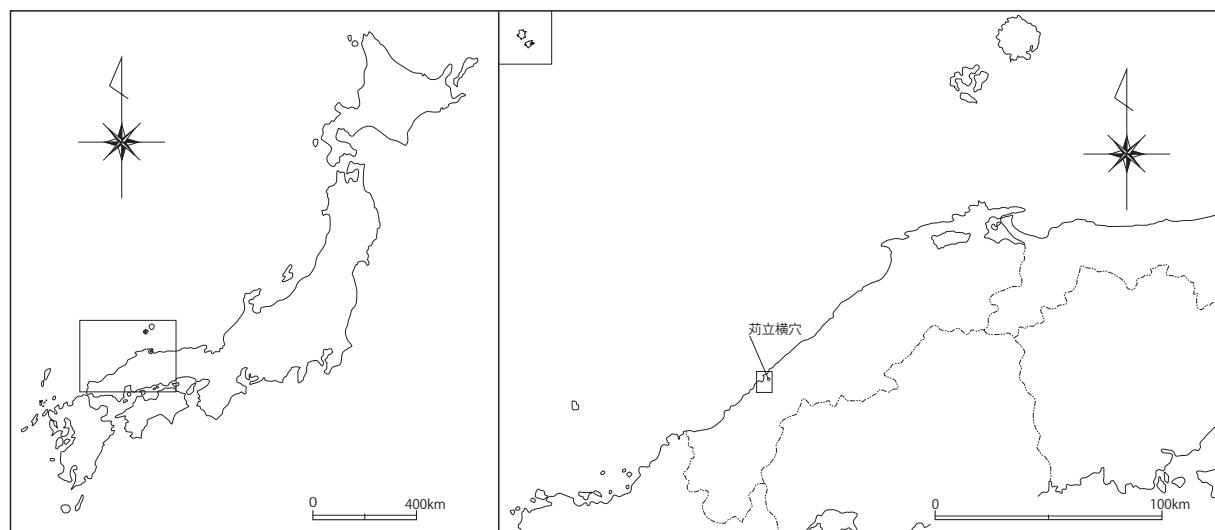


図1 茄立横穴墓位置



図2 遺跡位置図

代末～古墳時代初頭)以外の遺構は確認されていない。また、二つの遺跡からは、古墳時代から古代の土師器・須恵器を中心とする遺物は確認されているが、上古市遺跡で古墳時代中期初頭の杭列が検出された以外は、建物址等は確認されていない。

古墳時代には第4章で後述するように後期古墳や横穴墓が確認されているが、いずれも各地域の生活圏に築造されたものと考えられている(斎藤2000)。茄立横穴は、南から流れてきた三隅川が西へ屈曲する部分に北から注ぐ石田川の右岸に位置する低丘陵の南斜面に造墓されている。狭隘な小平野を擁するが三隅川まで直線で約300mの位置にあり、石田川に沿うように近世山陰道が並走している。

遺構が確認された古代の遺跡はないが、茄立横穴の至近に南面する海石西遺跡では縁釉陶器が出土しており、周辺に官衙遺跡が存在する可能性が考えられている(伊藤2018)。また、上古市遺跡では平安時代から鎌倉時代にかけての土器や木製品が出土している。

中世には石見国那賀郡三隅郷を基盤として石見西部に勢力を誇った在地豪族の三隅氏が登場する。三隅川河口には三隅湊があり、海辺領主の大賀氏が三隅氏や大内氏から領地や通行権を保証され、領国を越えた経済活動を行っていた(本田2013・2017)。中世・戦国期に三隅川河口域が海上交通の拠点になっていたことは、茄立横穴をはじめ三隅川の河口部右岸の湊浦の丘陵斜面に位置する高田横穴墓群の性格を検討する上でも示唆的である。(仁木)

2. 茄立横穴の概要(図3)

ここでは浜田市刊行の遺跡地図(榎原・藤田2011)に依拠しながら新たに確認された副葬品を踏まえて、茄立横穴の概要を記す。浜田市三隅町三隅に所在する茄立横穴は、急傾斜地の工事中に発見され、1996(平成8)年に調査が行われたものである。標高約10mの三群變成岩質の斜面に造られ、羨道部及び羨門部は破壊されており、玄室天井部の大半は剥落のため生きた稜線はほとんど残っていなかった。玄室は幅2.6m、高さ1m、奥行2.6mで平面形は各辺が直線ではないが正方形に近いものである。玄室内からは多数の人骨片が検出され、須恵器約30、大刀5、鉄鏃7、鎧1、刀子9、耳環5、切子玉6、ガラス小玉2などの多くの副葬品が出土した。人骨と大刀などは調査以前に動かされた形跡があった。人骨の鑑定によると、1体以上で内1体はかなり小柄な成人女性であると推定されている。耳飾り、玉類は左奥部に集中し、須恵器は主に玄室の右奥部と左前部の2点に集中しており、ほとんどが完形品であった。左前部の須恵器は追葬に伴い整理されており、初葬の可能性がある。また、右奥部の須恵器は長頸壺や有蓋高壺に逆転したものがあることから、1回の追葬とは決めにくく、全部で2～3回の埋葬があった可能性が指摘されている。初葬が石見6B～6C期、追葬が石見6C～7期とみられている。すなわち、これらの時期は石見須恵器編年でいう6B期～7期(榎原2010・岩本2019)が主体である。実年代に照らし合わせれば、古く位置づけても7世紀第2四半期は遡らず、もっとも新しいもので7世紀第4四半期に相当するものである。この年代観は、後述する大刀や鉄鏃からみても矛盾しない。なお、益田市本片子窯産と指摘される高台壺のほか(図3の★印の資料)、カキメを頻用する蓋壺や無蓋高壺など石見の地域色がうかがえる須恵器が多く含まれている。(仁木)

3. 出土遺物(図4～図8)

茄立横穴で出土した金属製品のうち、出土位置が原位置を保っているものは耳環(図8-4～8)のみである。ただし、今回の報告では出土状況図(図3)と個々の耳環の対応関係が突合できなかつたので、保留とした。また、大刀5口も人骨片とともに片付けられており(【写真1】参照)、被葬者への帰属関係も不明である。

【写真1】人骨片と大刀

なお、大刀は保存修復により旧状に復された資料である。鋒の進行により原形を保たないほどに劣化していた

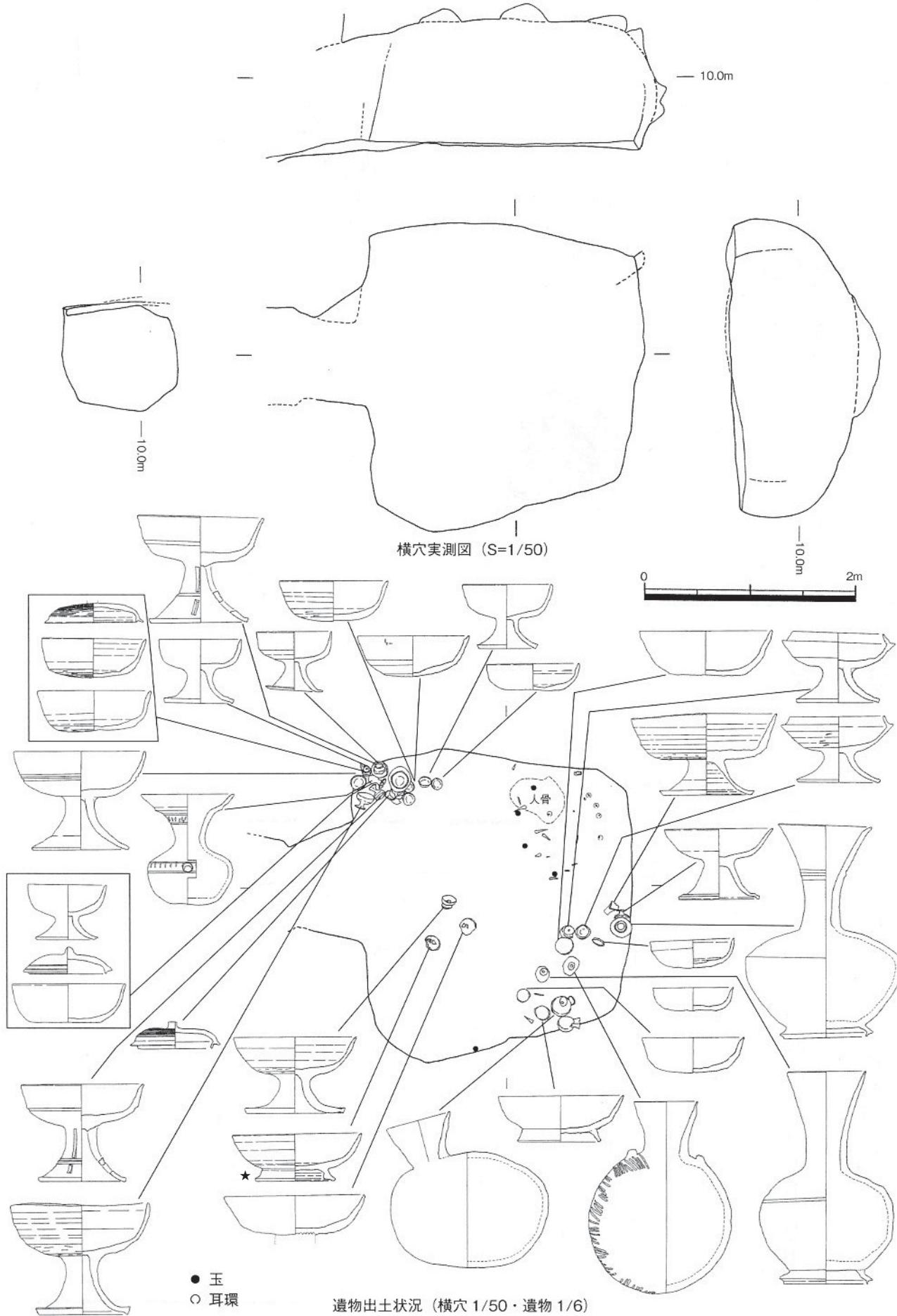


図3 茄立横穴墓遺物出土状況 (榎原・藤田2011 71頁)



写真1 人骨片と大刀

ため、図4-2と4は切先の近くでやや内湾気味になっているが、本来的には直線的な形状を呈したものと推察される。

大刀（1）：図4-1は柄頭を欠くため、厳密な意味での形式は不明である。しかし、後述するように、環付足金具等の装具のあり方から（豊島2013）、木製円頭大刀と考えられる資料である。全長48.7cm（鞘筒金具を除く全長は46.7cm）、刀身の全長37.2cm、茎部長9.5cm、刃幅は茎部側で2.8cm、切先側で2.4cmの両関の大刀である。柄頭以外の装具としては柄側からいざれも金銅装である柄縁金具、喰出鍔、鉢、責金具、環付足金具、責金具、鞘尻筒金具のほか、遊離しているため設けられた箇所は不明ながら单脚足金具が具備されている。柄縁金具と喰出鍔は鋲着のため、柄との接合部を詳細に観察できないが、柄縁金具3.0cm×1.75cmの楕円形で厚みは0.3cm、喰出鍔は3.4cm×2.2cmの楕円形を呈す板状のもので、柄の挿入孔は、2.0cm×0.6cmの楕円形と推察される。0.1cmの厚みを有する鉢は佩用側で亀裂欠損が認められる。佩用側に設けられた環付足金具は責金具で固定されている。鞘は現状の木質部の遺存状況からみて、断面形は10面程度の面取りがなされている。環付足金具は全長4.3cm、責金具で固定されている。古墳時代の鉄刀を分類した臼杵勲氏の研究に鑑みれば（臼杵1984）、均等両関一文字尻中細茎に分類され、TK209型式以降の7世紀代の形制に属する資料であり、切先がカマス切先であることと7世紀代という年代観に矛盾しない。また、福島雅儀氏の分類に照らし合わせれば、喰出鍔の出現と目釘が茎尻に近い位置に1孔だけの鉄刀は、定型化したⅢ群刀とされ、その初現を7世紀前半から中葉に位置付けている（福島2005）。

大刀（2）：図4-2は鉄製の喰出鍔と鉢を有するものである。全長64cm、刃部長57.7cm、茎部長6.3cm、刃幅2.0～3.1cmの両関の大刀である。僅かに切先が欠失しているが、直線的なカマス切先である。茎部長が6.3cmと短く、一孔の目釘孔が認められる。鍔の外縁が肥厚する喰出鍔である。4.1cm×2.9cmの楕円形を呈する。

形制は臼杵分類の均等両関一文字尻中細茎に分類され、TK209型式以降の7世紀代の形制に属する。

大刀（3）：図4-3の大刀は、全長83.4cm以上、刃部長77cm、茎部長4.3～6.4cm、刃幅2.6～3.6cmの両関の大刀である。両関は左右非対称のナデ関で刃部に対して茎部が著しく短く、目釘も茎尻に近い箇所に認められる。茎部の欠損や裁断も考えられるが、-4・5の大刀も茎部の目釘が茎尻に近く、全長も類似していることから、ほぼ同時代の作刀と考えられる。このように推測すれば、切先は欠損のため不確実性が残るが、-3がカマス切先であることから、-2の資料もカマス切先の可能性が高いと考えられる。形制は臼杵分類の均等両関一文字尻中細茎に相当する。この形制は7世紀代の年代観が与えられている。

大刀（4）：図4-4は全長85.2cm、刃部長79.2cm、刃幅2.8～3.8cmの両関の大刀である。-3と同じく関は茎尻からみて左右非対称の位置に關が施されているが、刀身からみて均等に關が施されている撫関の均等関である。刃部に対して茎部が著しく短く、目釘孔も茎尻に近い箇所に一孔認められる。ただし茎尻は刃側に抉りが認められる。切先はカマス切先である。形制は臼杵分類の均等両関栗尻（隅抉尻）中細茎に相当する^(註1)。この形

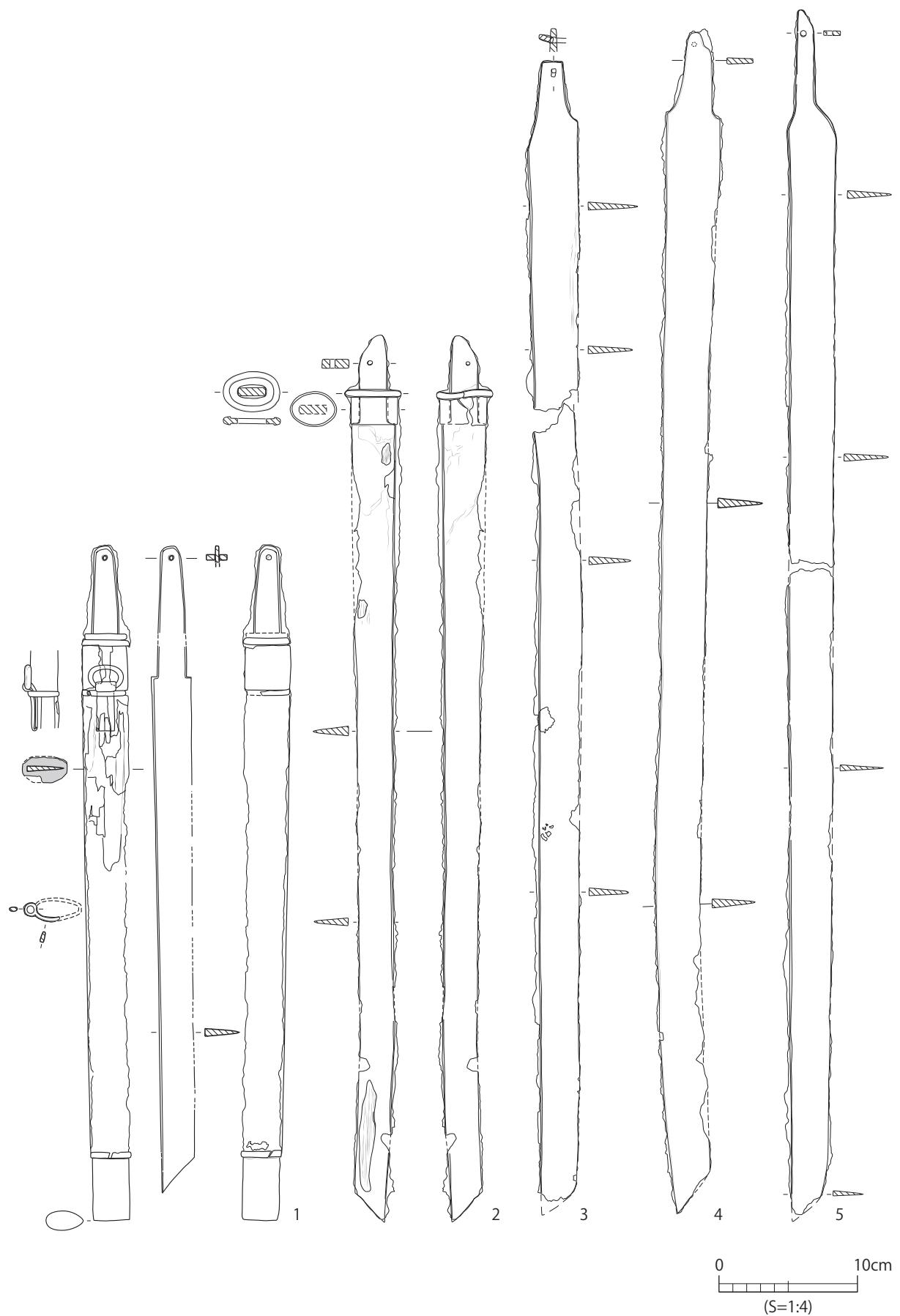


図4 莖立横穴墓出土遺物 (1) : S=1/4

制は7世紀代の年代観が与えられている。

大刀（5）：図4-5は全長86.8cm以上、刃部長78cm、刃幅2.1～3.4cmの両関の大刀である。刀身からみて不均等に關が施されている撫關の不均等両関である。刃身に対して茎部が著しく短く、目釘孔も茎尻に近い箇所に一孔認められる。切先は-3と同様の推測からカマス切先である可能性が高い。形制は臼杵分類の不均等両関一文字尻（隅切尻）細茎に相当する。この形制は6世紀後半から7世紀初頭の年代観が与えられている。

以上、大刀（1）～（5）の年代観については、概ね7世紀代の資料と位置付けられる。

鉄鎌（図5・6）：図5-1～7は有茎の平根鎌である（杉山1988・松木2007・水野2013）。法量は表1のとおりで、-1～5は方頭式の平根鎌で、-1～3は完形品とみてよい。当該資料の形式（両角関）は古墳時代前期中頃から中期前葉を中心に存在する形式であるが、中期中葉からは一旦みられなくなり、再び古墳時代後期から終末期に相当する6世紀から7世紀代にかけて、西日本に広く認められる形式である。なお、古墳時代後期における方頭式と圭頭式の平根鎌の分布域の中心は、兵庫県西部以西の瀬戸内側であることが指摘されており、方頭式の平根鎌は「北部九州勢力と瀬戸内海沿岸諸地域の勢力の関係」によって広まったと考えられている（尾上1993）。

島根・鳥取の山陰両県において中期の例を除くと（鳥取市の里仁33号墳例）、後期前葉に位置付けられる浜田市旭町所在・やつおもて18号墳（墳長28mの造出し付円墳）の第1主体部出土例が後期の類例としては山陰で最も古い資料に位置付けられる。やつおもて18号墳は第2主体部が中期末に位置付けられ、第1主体部（MT15～TK10型式併行期）の構築をもって墳丘2段目の築造が行われている特殊な古墳である。第1主体部からは、古墳時代後期前葉～中葉の継体朝期に摂津・山背で特徴的な鎌身三角形の長頸鉄鎌（仁木2017・2019）が出土している。やつおもて18号墳は雄略朝期の新興勢力（第2主体部・鉄剣出土）が倭王権との通交を契機として築造され、継体朝期にも倭王権との関係性を維持した石見の新興勢力（第1主体部段階）の円墳と評価できるのではないだろうか。さらに、方頭式の平根鎌が副葬されている事実は重要である。尾上氏は新羅に故地のある方頭式の平根鎌が、6世紀前半に新羅地域から北部九州地域にもたらされた背景に、『日本書紀』に記された筑紫国君磐井と新羅の結びつきを想定し、方頭式の平根鎌の導入に際して、「畿内勢力を介せず地方勢力が朝鮮半島から独自に導入し、さらに畿内を含まない地域勢力同士の関係によって普及していく」ことを説く（前掲尾上1993）。つまり、やつおもて18号第1主体部に副葬された鎌身三角形の長頸鎌は倭王権、方頭式の平根鎌は九州北部勢力（磐井勢力）との通交関係を表徴している可能性が考えられるのである。当該期における九州北部の首長墳においても、鉄鎌から倭王権と九州北部勢力の通交関係を認めることができる。例えば、九州北部（有明海沿岸）に所在するTK10型式併行期の福岡県八女市の釣崎3号墳（前方後円墳・35m）からは、方頭式の平根鎌と圭頭式の平根鎌に、摂津・山背を故地とする鎌身三角形の長頸鎌が共伴している。継体朝の画期として評価した岡山県津山市の中宮1号墳（仁木2019）に、方頭式の平根鎌が1本含まれていることは、上記の想定を補強する。このほか、山陰両県の類例としては、浜田市治和町の森ヶ曾根古墳、吉賀町（旧・六日市町）の大谷原古墳、出雲市の神門横穴墓群第10支群のJ-1号墓とK-1号墓、雲南市木次町の下布施1号横穴墓、鳥取県米子市の石州府59号墳と日下5号横穴、日野郡江府町の佐川6号墳、日南町の坂本横穴墓群3号墓、岩美町の浦富3号墳、岩美町蒲生の山ノ神古墳で確認される。森ヶ曾根古墳は後期中葉の築造で終末期まで追葬が行われている無袖化した石室墳で、治和町所在めんぐろ古墳（九州系の初期横穴式石室墳・MT15型式併行期）と同じ山陰西部沿岸部に位置することから、鉄鎌の故地に九州北部との関係性が想起される。ただし、当該資料（図6-17）は通有の方頭式が角関なのに対して、ナデ関であることは注意が必要である。先端が欠失している可能性があり、島根県吉賀町六日市に所在する大谷原古墳例（図6-18）の平根鉄鎌も先端が欠失しており、ナデ関であることから、柳葉式の平根鎌であると判断される。神門横穴墓群例は後述するとして、TK43型式併行期の初葬から飛鳥I併行期まで追葬されていた下布施1号横穴墓は、出雲山間部に位置し（『出雲國風土記』仁多郡布施郷）、大原郡家推

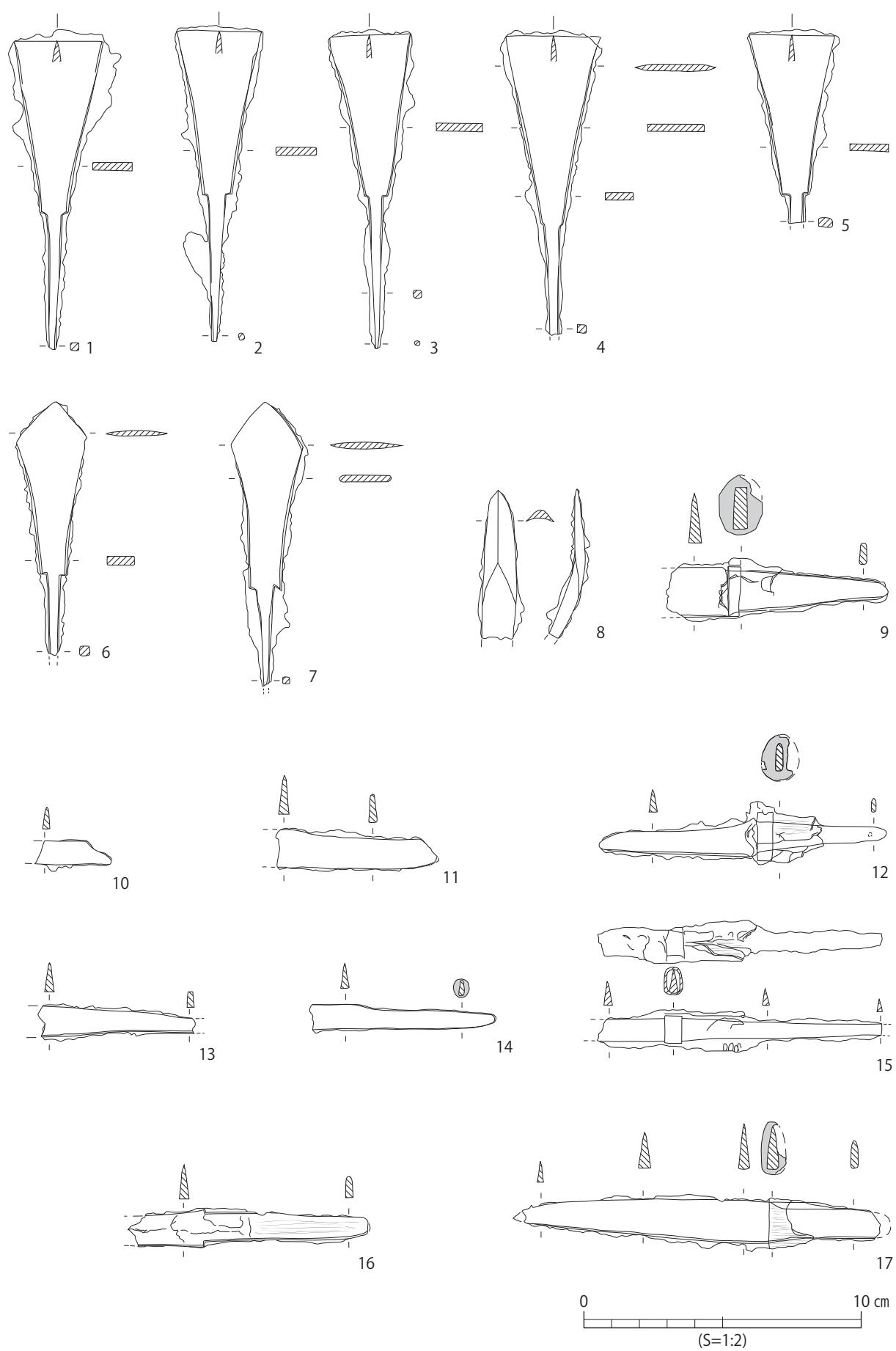
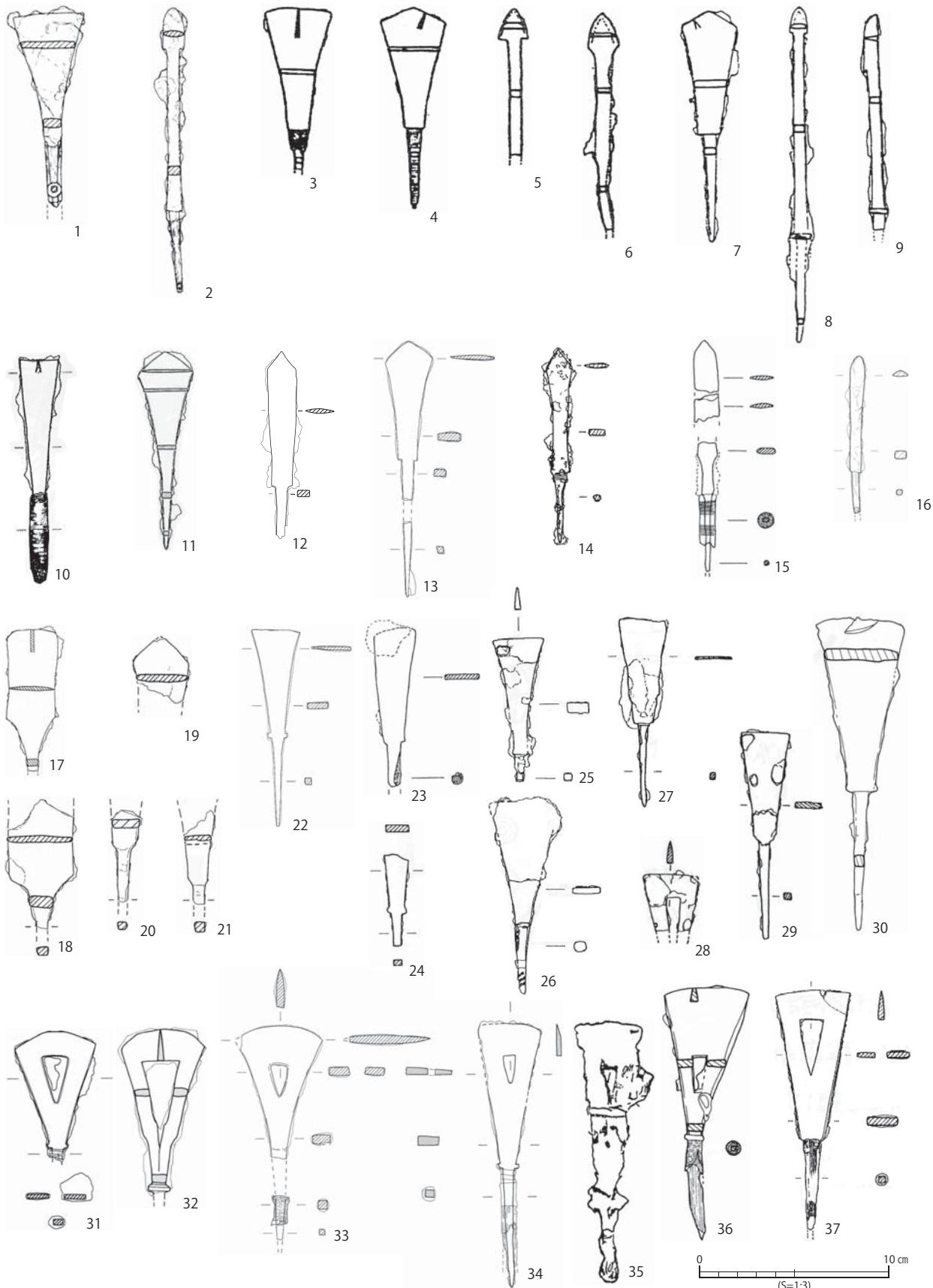


図5 荊立横穴墓出土遺物（2）：S=1/2



1-2 やつおもて 18号墳第1主体部(島根県浜田市旧旭町) 3~6 釘崎3号墳(福岡県八女市) 7~9 正籠3号墳(福岡県糟屋郡宇美町) 10 里仁33号墳(鳥取県鳥取市里仁) 11 西浦山古墳(鳥取県鳥取市国府町美歎) 12 林43号墳(島根県松江市旧玉湯町) 13-22 神門横穴墓群第10支群J-1号墓(島根県出雲市) 14 伊賀武社境内横穴墓(島根県奥出雲町旧仁多町) 15-23 下布施横穴墓群1号横穴墓(島根県大原郡木次町大字北原) 16坂本横穴墓群6号墓(鳥取県日南町霞) 17森ヶ曾根古墳(島根県浜田市治和町) 18-21 大谷原古墳(島根県吉賀町六日市) 24 佐川6号墳(鳥取県日野郡江府町佐川) 25-26 山ノ神5号墳(鳥取県岩美町) 27 坂本横穴墓群3号墓(鳥取県日南町霞) 28 内ノ倉山横穴群17号墓(鳥取県日野郡日南町) 29 内ノ倉山横穴群19号墓(鳥取県日野郡日南町) 30 石州府59号墳(鳥取県米子市) 31 古天神古墳(島根県松江市大草町) 32 上塙治築山古墳(島根県出雲市上塙治町) 33 神門横穴墓群第10支群K-1号墓(島根県出雲市) 34 上塙治横穴墓群第3支群15号横穴墓(島根県出雲市上塙治町) 35 上塙治横穴墓群第6支群(島根県出雲市上塙治町) 36 下古墳群5号横穴墓(鳥取県米子市下字堂平日南) 37 浦富3号墳(鳥取県岩美町浦富)

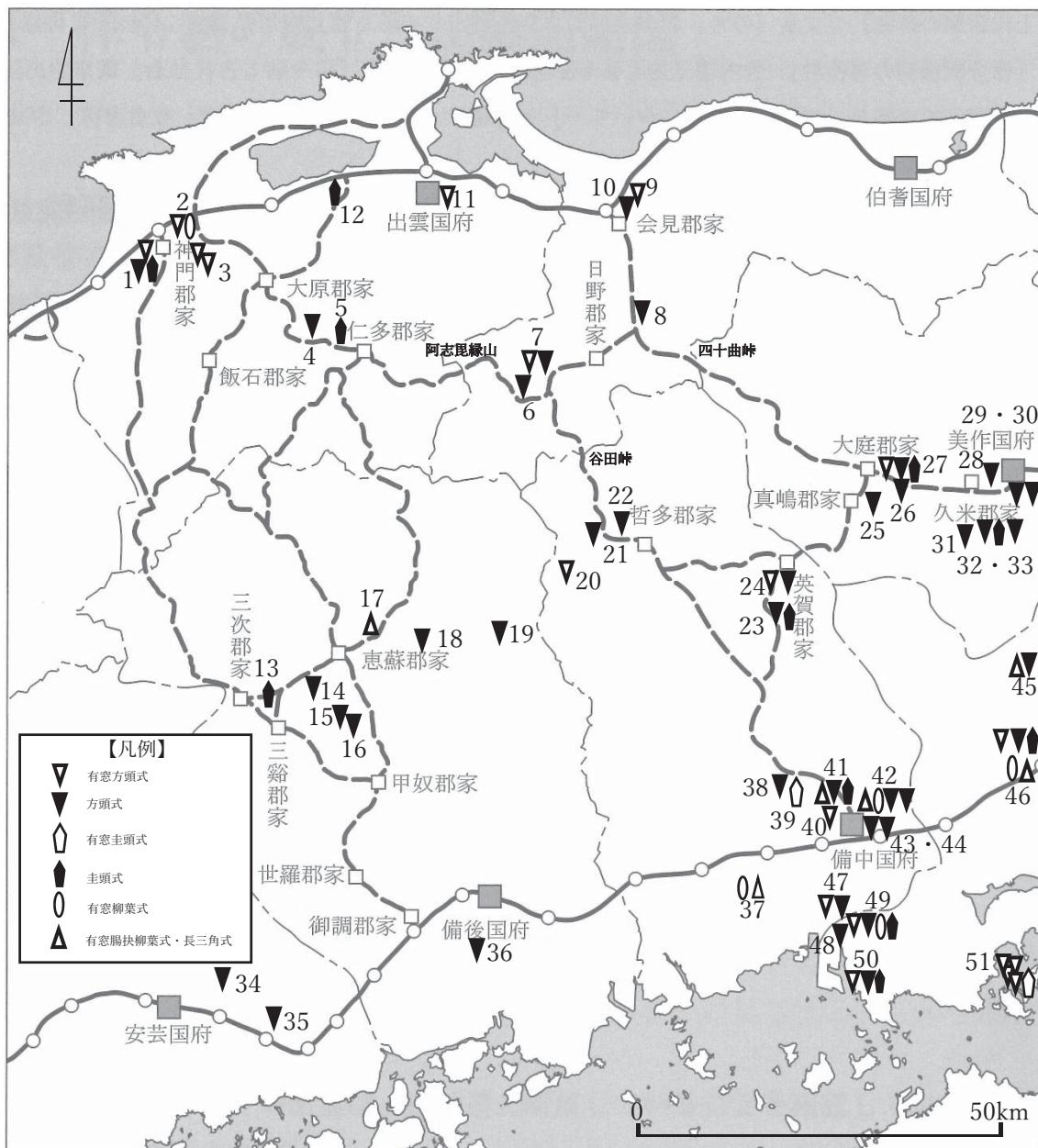
図6 山陰両県における方頭式・圭頭式の平根鎌と関連資料

定地や斐伊郷新造院、斐伊新造院尼寺の所在する木次町北部、金銅装刀子を出土した平ヶ廻横穴が所在する木次町日登地区に通じる久野川から布施川に沿った街道筋に面し、東に向かえば後述する伊賀武社境内横穴墓（『出雲国風土記』仁多郡三処郷）にも通じる。また、形状は方頭大刀に類似するが、「一元的な装飾付大刀の製作技術とは異なる点で、地方生産も含めた特別な生産体制が考えられ、その配布・入手経路においても単純に畿内政権における小地域の把握だけではない特殊な背景を想定すべき」装飾付大刀が出土している（松尾2002）。方頭式の平根鎌の故地と併せて、備中をはじめとする山陽側の通交も考えられる。TK43型式期新相～TK209併行期の初現期・石棺式石室の古天神古墳、TK209型式併行期の出雲西部の最高首長墳・上塙治築山古墳と下位層の上塙治横穴墓群、7世紀前葉の石州府59号墳と日下5号横穴はいずれも古代山陰道ルートに面しており、TK43型式併行期の石室墳である佐川6号墳と、TK209型式～飛鳥I併行期の内野倉山横穴墓や坂本横穴墓群は、日野川に沿う陰陽ルート（出雲・伯耆・備中・備後）に位置することから、山陽方面との通交が考えられる。なお、10基以上からなる坂本横穴墓群は群内で副葬品に較差があり、銀象嵌の円頭柄頭・八窓透鐔など、装飾を施した大刀も出土しており、内ノ倉横穴墓群と併せて江の川と高梁川上流部の横穴墓に共通する閉塞石が報告されている。浦富3号墳はTK209型式併行期（7世紀初頭）築造の石室墳で、有窓方頭式の平根鎌、銀象嵌鐔の大刀、小型の鳩目金具2個と全長44cmのカマス切先・喰出鐔を有した鉄刀が出土している。後者の大刀は後述する薊立横穴の木装円頭大刀と同形式の大刀である可能性が考えられる。なお、2号墳からも環付足金具（短脚C式：豊島2013）や大刀が出土している。浦富古墳群は5基の石室墳が浦富海岸の砂丘上に築造されており、非在地的な特徴を有する石室墳群で、副葬品にも出雲産須恵器や但馬でみられる「×」の漆書記号のある須恵器が含まれており、因幡と但馬の国境に近いことから、海上交通や陸上交通（プレ古代山陰道）を介して、倭王権をはじめとする多様な通交先が類推される。その意味において、有窓方頭式の平根鎌は後述するように、吉備もしくは山陽方面との関係に来歴するのかもしれない。同じく、7世紀代の石州府59号墳と日下5号横穴は、推定古代山陰道ルートに南面し、TK43型式併行期の築造でTK217型式併行期まで追葬された石室墳の山ノ神5号墳は、但馬との国境（古代山陰道推定ルート）である蒲生峠の近くに位置している。これらの被葬者も他地域との交流を示す文物を入手できる立場にあったと考えられる。

図5-6と7の鉄鎌は先端が尖った圭頭式の平根鎌である。方頭式と同じく古墳時代前期から認められるが、当該資料の形式（有段闕）は、中期末葉から九州北部を中心に盛行し、古墳時代後期後葉（TK43型式併行期）以降は関東以南の各地で確認されているが（前掲杉山1988）、古墳時代後期を通じて九州北部と兵庫県西部以西の瀬戸内側に偏在する（前掲尾上1993）。古墳時代後期で早い例をみれば、九州北部（玄界灘沿岸・有明海沿岸）では後期前半（MT15型式併行期）の福岡県宇美町・正籠3号墳（前方後円墳・33m）と先述の福岡県八女市・釣崎3号墳から出土している。両古墳も継体朝期（MT15～TK10型式併行期）の標識的な首長墳である。正籠3号墳からも先述の継体朝期に摂津・山背に地域性がみられる鎌身三角形の長頸鎌と、物集女車塚古墳出土の片

【表1】鉄鎌法量表 (cm) ※()は欠失のため残存長

| 図版番号 | 形 式 | 全 長 | 身部長 | 身部幅 | 身部厚 | 茎部長 |
|------|-----|--------|-----|-----|------|-------|
| 図5-1 | 方頭 | 11.1 | 6.2 | 3.2 | 0.25 | 4.9 |
| 図5-2 | 方頭 | 11.2 | 5.8 | 3.0 | 0.3 | 5.4 |
| 図5-3 | 方頭 | 11.3 | 5.8 | 2.9 | 0.3 | 5.5 |
| 図5-4 | 方頭 | (10.3) | 6.8 | 3.4 | 0.3 | (3.5) |
| 図5-5 | 方頭 | (6.8) | 6.8 | 3.1 | 0.3 | (1.0) |
| 図5-6 | 圭頭 | (9.1) | 6.2 | 2.5 | 0.25 | (2.9) |
| 図6-7 | 圭頭 | (10.3) | 6.7 | 2.6 | 0.2 | (3.6) |



1. 神門横穴第10支群K-1号墓・J-1号墓、2. 上塩治築山古墳、3. 上塩治横穴墓群第3支群15号墓・第6支群、4. 下布施1号横穴墓、5. 伊賀武神社境内横穴墓、6. 坂本横穴墓群3号墓、7. 内ノ倉山横穴墓群17号墓・19号墓、8. 佐川6号墳、9. 日下5号横穴、10. 石州府59号墳、11. 古天神古墳、12. 林43号墳、13. 宮の本第20号墳、14. 矢野谷古墳、15. 大番奥池第3号古墳、16. 長畑山古墳、17. 唐櫃古墳、18. 宮本古墳、19. 梶平塚第2号古墳、20. 道上古墳、21. 門前中屋古墳、22. 横見1号墳、23. 定西塚古墳、24. 赤茂1号墳、25. 戸坂1号墳、26. 奥田古墳、27. 中原25号墳、28. 二宮大成遺跡1区古墳、29. 的場2号墳、30. クズレ塚古墳、31. 中宮1号墳、32. 桑山南1号墳、33. 細畝3号墳、34. 二反田第1号古墳、35. みたち第3号墳、36. 田上第2号古墳、37. 段林古墳、38. 立坂北1号墳、39. 金子石塔塚、40. 江崎古墳、41. 緑山6号墳（有窓）/緑山17号墳、42. 王墓山古墳（有窓）/赤井西古墳群2号/赤井南古墳群4号、43. 高坪古墳、44. 前池内4号墳、45. 岩田14号墳（有窓）/岩田7・9号墳、46. 塚段古墳第1石室、47. 茂浦2号墳、48. 古城池南古墳、49. 湾戸7号墳、50. 金浜古墳、51. 喜兵衛島4・5（圭頭含む）・6・8号墳

図7 古墳時代後期・終末期における出雲周辺の有窓平根鏃と関連鉄鏃の分布

※「出雲一周辺諸国間の陸上交通路（模式図）」（中村2011）を基に作成

刃式の長頸鎌に類似した鉄鎌をはじめ、素環頭大刀、柄に抉りの入った大刀や馬具等も副葬されており、畿内の影響を受けたV群系大型の円筒埴輪（小島2008）が出土している。

圭頭式の平根鎌も山陰では稀な鉄鎌である。中期の例を除くと（西浦山古墳例）、山陰両県の後期古墳出土例は本例を含め4例しかない。石見では吉賀町（旧・六日市町）の大谷原古墳（円墳・10m）、出雲では九州系の両袖横穴式石室墳を内包する松江市玉湯町の林43号墳（前方後円墳・18m）、出雲市（神門郡）の神門横穴墓群第10支群のJ-1号墓、奥出雲町（旧仁多町）の伊賀武社境内横穴墓で確認される。大谷原古墳は6世紀後半から7世紀前半に位置付けられる無袖の石室墳である。圭頭式の平根鎌のほか、棘状関を有する片刃の長頸鎌等、全長約58（刃部長49）cmの板鍔付大刀も出土している。大谷原古墳は益田市の日本海に注ぐ高津川に沿った陰陽ルートの中央に位置し、奇しくも墳丘の東側をかすめるように津和野藩の参勤交代路が存在する。鉄鎌は九州北部と山口県東部（岩国）を中心とする山陽側との通交による来歴が想像される。林43号墳は古墳時代後期後葉（TK43型式併行期）に位置付けられるが、出雲における導入期の横穴式石室であり、九州系石室という点において鉄鎌の故地が九州北部にあることを暗示させる。神門横穴墓群第10支群のJ-1号墓は、棘状関のある方頭式の平根鎌を共伴していることから、TK209型式併行期以降の資料と目される。ここで注目されるのが、同支群の

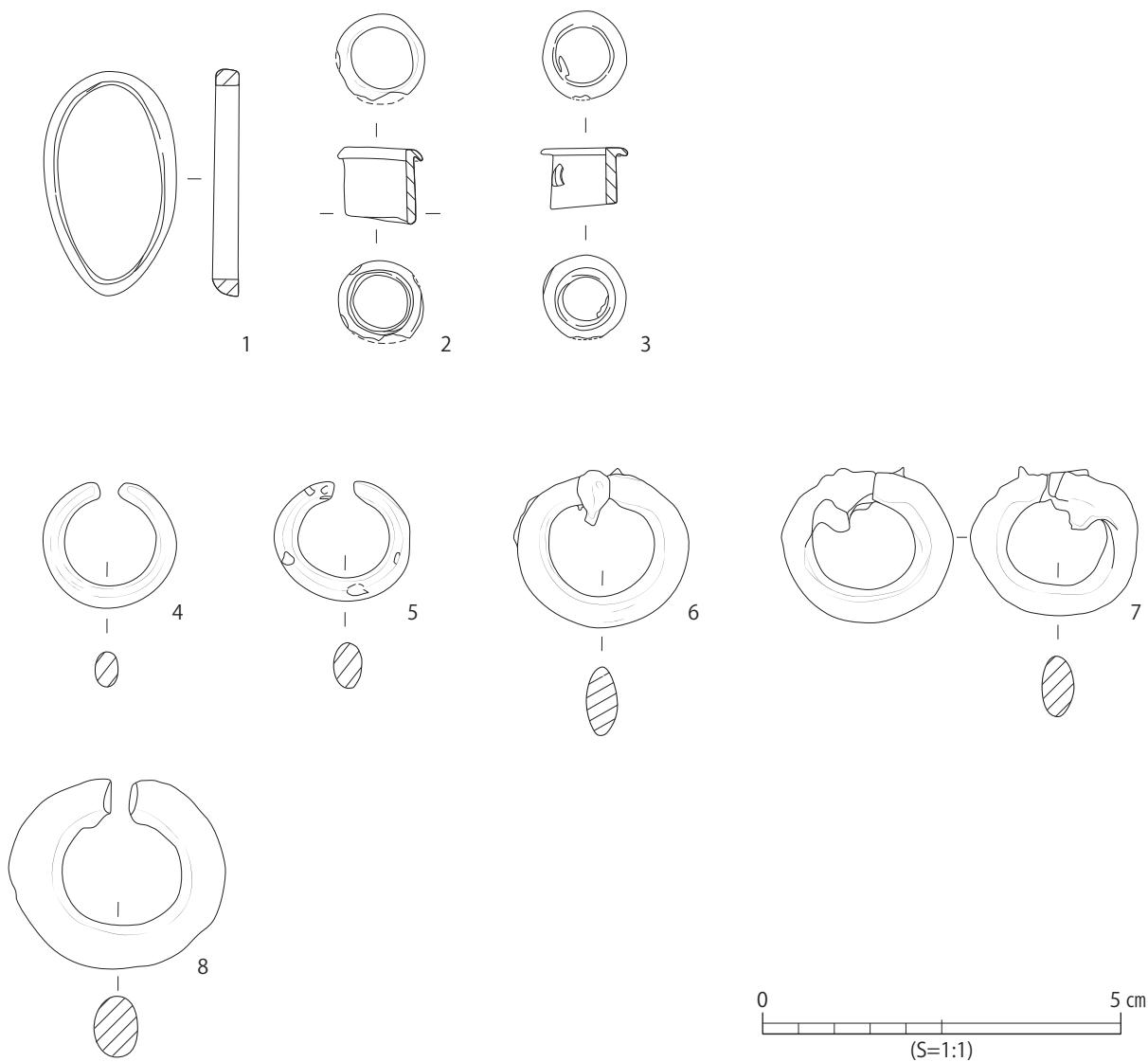


図8 荘立横穴墓出土遺物（3）：S=1/1

K-1号墓を含めて出雲・伯耆で6例（K-1号墓は5個体の出土）に上る有窓方頭式の平根鎌（尾上1993・1995）が出土している事実である。この種の方頭式の平根鎌については、近年の集成検討で、瀬戸内地域の地域色（寒川2016）、畿内地域では出土数が限られ、西側の北部九州から瀬戸内地方にかけての分布が指摘されており（土屋2018）、「岡山平野地域では、独自の慣習に基づいて透かし穴をあけている」という地域的特殊性に対する指摘（前掲尾上1993・1995）が追認されている。古天神古墳例、上塩治築山古墳例、神門横穴墓群第10支群K-1号墓例は、瀬戸内地域や吉備との関連が想定できる。このことから、神門横穴墓群第10支群のJ-1号墓の方頭式・圭頭式の平根鎌も、山陽・吉備からの入手とみてよいだろう。飛鳥I併行期の伊賀武社境内横穴墓例は副葬鉄鎌11例すべてが圭頭式で、全長93.1（刃部長79.1）cmの板鍔付の大刀を伴っている。奥出雲の山間部における横穴墓においては、圭頭式の平根鎌は他に例が見られない。ただし、これに類似する形態の鉄鎌が下布施1号横穴と坂本横穴6号墓に認められる（図6-15・16）。伊賀武社境内横穴墓は意宇郡西部（旧玉湯町）・大原郡（旧大東町・旧木次町北部）・神門郡（出雲市）と仁多郡北部（三処郷）を結ぶ南北交通路からも近く、仁多郡が広島県三次方面や鳥取県日南方面に至る出雲山間部の交通拠点であることから、下布施1号横穴墓、内ノ倉山横穴墓群、坂本横穴墓群と同じく鉄鎌の入手先が山陽側に求められる可能性が高い。なお、出土した大刀と鉄鎌は、理化学的分析により岩鉄（鉄鉱石）を始発原料とするもので、製作はすべて鍛造されていて、多くは低炭素鋼であるとの指摘も（安来市体育文化振興財団 和鋼博物館2001）、在地の生産というより他地域からの来歴が示唆される。以上をまとめると、出雲と伯耆西部の有窓鉄鎌と通有の方頭・圭頭式の平根鎌は、図7の分布状況からみても、吉備が故地になると結論される。図7は一部を除いてTK209～217型式併行期の出雲周辺の出土古墳を集成したものであるが、管見の限り、本州島西部において最も濃密に分布している地域（備前含む）であることが確認できる。詳細は別稿に準備中のため、分布論的現象面についてのみ要点を記す。①各種の有窓鉄鎌出土古墳、有窓鉄鎌と方頭式あるいは圭頭式の平根鎌が共伴する古墳は備中周辺の吉備に集中する^(註2)。②備中から出雲・伯耆西部に至る推定古代交通路とその結節点（郡家）に近在する古墳・横穴墓からの偏在的な出土。③山陰の分布中心地は出雲西部（神門郡）にある。このことから、この地域の有窓鉄鎌と方頭・圭頭式の平根鎌は、林43号墳などの一部の例外を除けば、その大半が吉備から出雲・伯耆西部に一元的に拡がった考古資料と結論される。以前に、欽明朝（TK43型式併行期）を画期とする出雲西部の開発と倭王権の戦略拠点を説く中で（仁木2017a）、奈良時代の史資料から確認されている出雲西部の「吉備部」と備中の「出雲部」のルーツの一端が古墳時代後期の彼我にあった可能性を、備中・こうもり塚古墳と出雲・大念寺古墳の共時的築造、墳丘形態と石室開口方向等の共通性から指摘した（仁木2017b・前掲2019）。これら鉄鎌の出雲・伯耆西部への拡散の中心期が、出雲西部の開発が進展する推古朝（池淵2019）に同期していること、TK209型式併行期の出雲西部の最高首長・上塩治築山古墳とその下位階層の横穴墓群から出土している点を踏まえれば、上記の鉄鎌は古墳時代後期・終末期における吉備と出雲の通交関係を証左する考古資料と評価することができよう。また、これらの鉄鎌を副葬する古墳・横穴墓が吉備と出雲を結ぶ推定古代道沿いと郡家推定地付近に分布する現象は、次章で後述する倭王権の交通戦略と地域支配の画期を反映したものと推察される。とりわけ、備中北部・英賀郡家周辺（真庭市北房町）における7世紀から8世紀初頭の首長墓系列（定東塚古墳→定西塚古墳→定北古墳・大谷1号墳・定5号墳→定4号墳）の出現と、複数系列の群集墳・横穴墓群形成は、倭王権による備中北部の開発拠点化と出雲と吉備（備中南部）、美作の通交関係への関与を十分に窺わせる^(註3)。

以上、鳥取・島根の山陰両県における古墳時代後期・終末期の方頭式・圭頭式の平根鎌を副葬する古墳を概観してきた。荅谷横穴の鉄鎌については、山陰沿岸西部の河川河口域に立地するという地理的条件からみて、瀬戸内海沿岸地域というよりは、九州北部地域との関係性を想定できるものと考えられる。有窓鉄鎌、方頭式と圭頭式の平根鎌は、西日本の山陰側においては極めて希な鉄鎌であるが、これを副葬する山陰両県の古墳・横穴墓の性格に一定の要件が見てとれる。すなわち、立地に①海上交通あるいは陸上交通の起点・中継地が考えられ、次

いで②新来の埋葬施設、③装飾付大刀やそれに準ずる大刀の副葬等、④最高首長墳を含む上位階層墳・古墳群・横穴墓群内における上位階層への副葬である。山陰における後期・終末期の有窓鉄鎌、方頭式と圭頭式の平根鎌は、吉備と九州北部などの領域外界との通交を有する被葬者の性格を反映した考古資料と位置付けられる。

鉈：図5－8の鉈は先端部のみ確認されている。残存長5.4cm、身幅1.2cm、刃先から身部にかけて内反りしている。

刀子：図5－9～17は刀子である。－9は残存長8.0cmの両関の刀子で、木製装具が遺存しており、不明瞭ながら刃部と柄部の境に10面程度の面取りが施されている。－10は残存長2.8cmの刀子の柄部である。柄部幅0.8cm、厚みは0.12～02.5cm、隅尻でわずかに抉りが入っている。

－11は残存長5.8cmの刀子で、関はナデ肩の片関、刃部がわずかに残存している。刃幅1.4cm、柄の幅は1.1cm。－12は全長10.4cm、刃部長5.7cm、柄部長4.7cmの両関がの刀子である。刃幅は0.7～1.4cmで、刃がやや内側に目減りしている。X線写真では柄部に鉄製と思われる口金が確認できる。また、木柄の拵えは0.7cm×0.8cmの断面楕円形を呈したものである。なお、柄部には不明瞭ながら目釘が一孔穿たれている可能性がある。

－13は残存長5.6cmの無関の刀子である。刃幅1.0cm、柄部幅0.5cm。－14は残存長6.3cmの刀子で、関はナデ肩の片関、刃幅0.9cm、柄部には0.6×0.7cmの断面楕円形の木柄が遺存する。－15は残存長10.2cmの無関の刀子である。刃幅0.8cm、柄部幅0.4～0.8cmと、細い印象を受けるとともに柄部の断面形態も刃部と変わらない断面扁三角形を呈する。柄部には厚さ0.1cmの鉄製口金と木質が遺存しているが、木柄の拵えは不明瞭である。－16は残存長8.7cmの両関の刀子である。刃幅1.2～1.4cm、柄部幅0.8～1.1cmで柄部には木質が遺存する。－17は残存長12.8cmのナデ肩両関の刀子で、全長は13.2cm程度に復元される。最大刃幅1.6cm、柄部幅1.1cmで、柄部には木質が遺存しており、0.9×1.9cmの断面倒卵形の木柄に復元される。

柄縁金具：図8－1の柄縁金具は青銅製の金銅装で、3.15cm×1.9cmの倒卵形を呈しており、刃幅の法量から図5－2の大刀の装具である可能性が考えられる。

鳩目金具：図8－2・3の鳩目金具は金銅装で、－2は上部で直径1.2cm、下部で直径1.05cm、厚み0.12cm、高さ1.1cm－3は上部で直径1.2cm、下部で直径0.95cm、厚み0.15cm、高さ0.9cmである。図4－1の木装円頭大刀の柄頭に使用された可能性のほか、図4－2の大刀の柄頭に使用されたものと考えられる。

耳環：図8－4～8は銅芯の中実耳環である。肉眼観察から銀箔張鍍金の可能性が高いものと考えられる。銅芯耳環は6世紀中葉を境にして外径30mm前後、断面径も6mm以上の大型太環になることが指摘されている（辻村1997）。ただし、全国的に6世紀代に爆発的に増える耳環は、朝鮮半島南部にみる太環式のものではなく、中太環式とも言えるもので、断面の直径が5～6mm前後のものとの指摘があり、大形（3.0～3.3cm）、中形（2.5～2.7cm）、小形（1.8～2.0cm）に分類されている（宇野2008）。宇野氏の分類に従えば、苅立横穴墓からは小形・中形・大形の耳環が出土している。

－4は外径（縦×横）19mm×18mm、断面径（同）3mm×5mm、－5は外径（同）19mm×17mm、断面径（同）4mm×6mmの小形の耳環である。－6は外径（同）が22mm×25mm、断面径（同）が4.5mm×10mm、－7は外径（同）20mm×24mm、断面径（同）4.5mm×9mmの中形の耳環である。－8は外径（同）2.7mm×30mm、断面径（同）6mm×9mmの大形の耳環である。－8の耳環は大形で、断面形態がほかの耳環に比べて円形に近い楕円形であることから、最も古相を呈する。また、7世紀前半になると耳環の小型化傾向が現れるとともに、断面の楕円化が顕著になることから（前掲辻村1997）、－8→－5・6→－4・5の新古関係が導き出される。なお、須恵器の出土状況から2から3回の追葬が指摘されている（前掲榎原・藤田2011）ことを勘案すれば、－8の大形は対の出土ではないが、初葬に伴うもので、－5・6は1回目の追葬、－4・5は2回目の追葬に伴う可能性も想像される。（仁木）

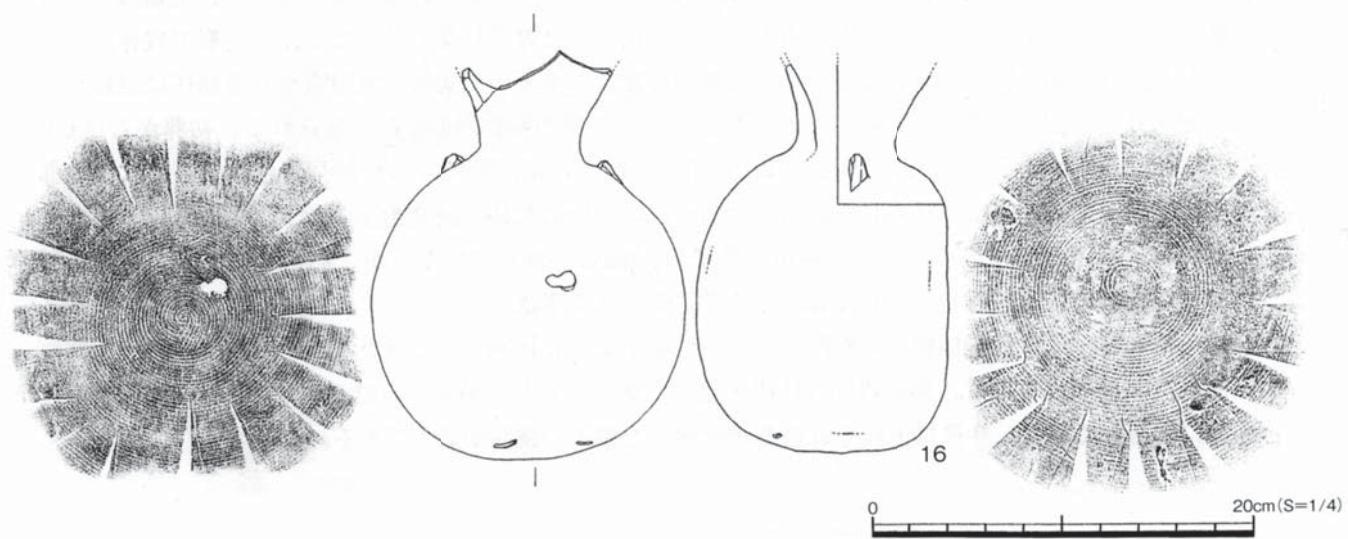
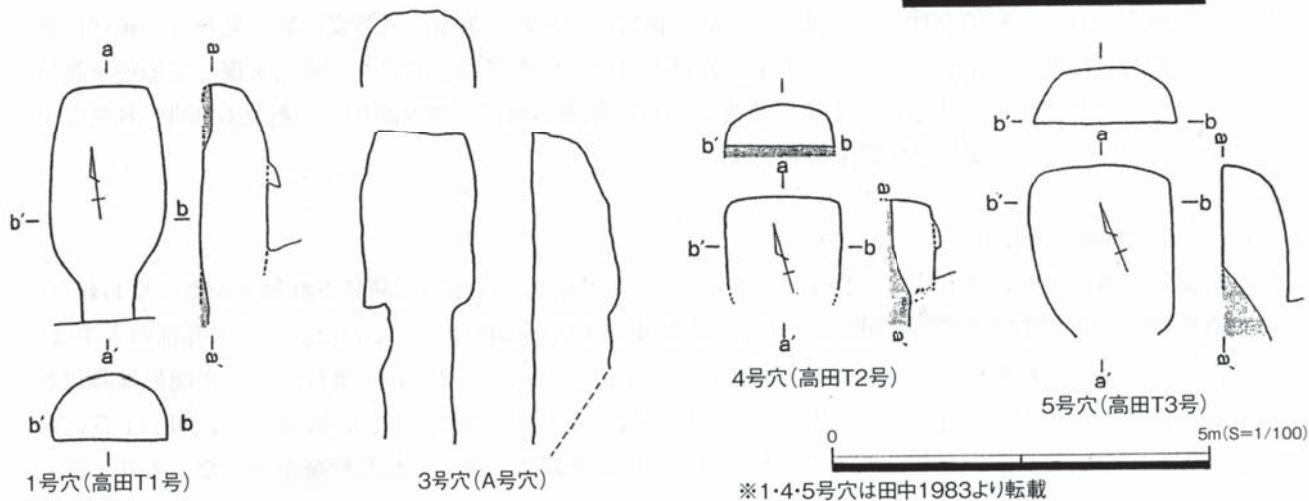
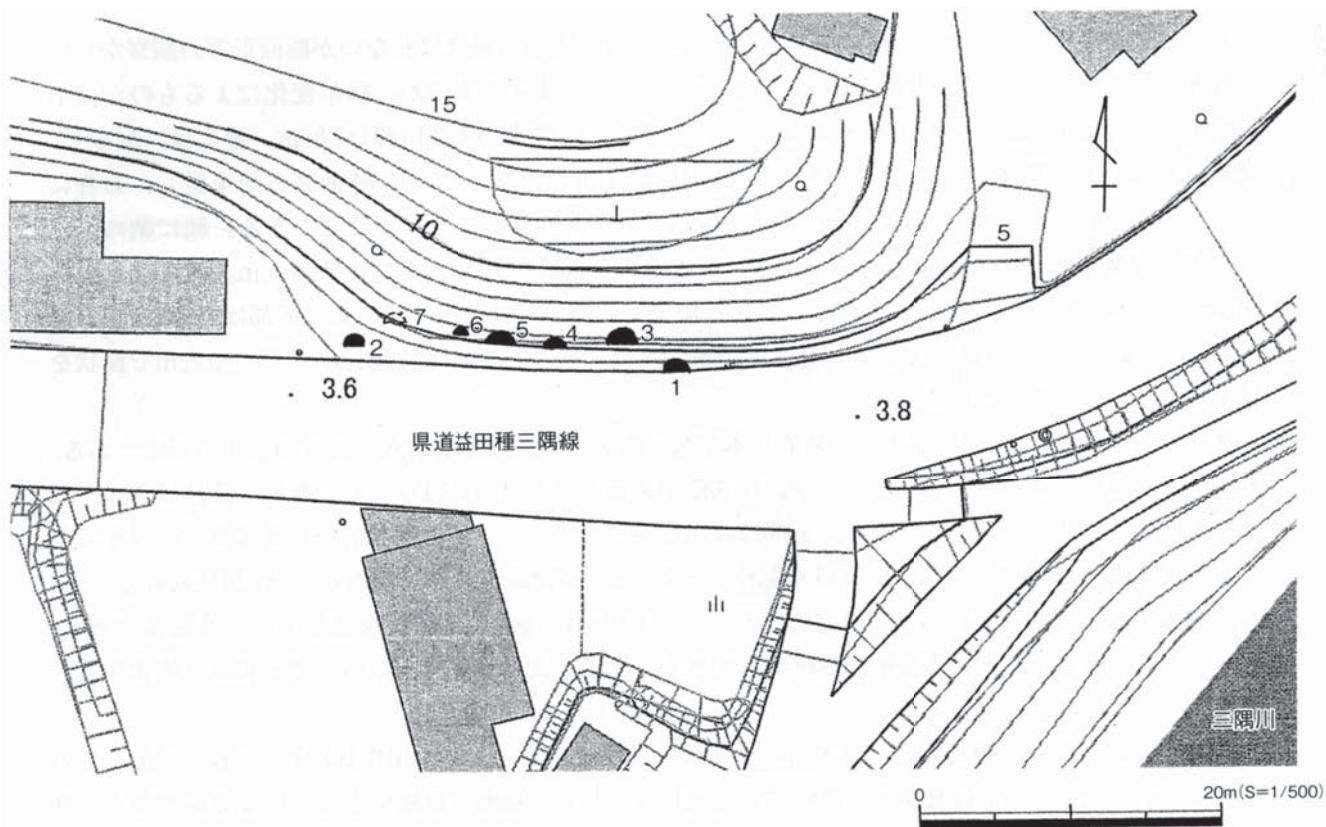


図9 高田横穴墓群 (1) (榎原・藤田2011 69頁)

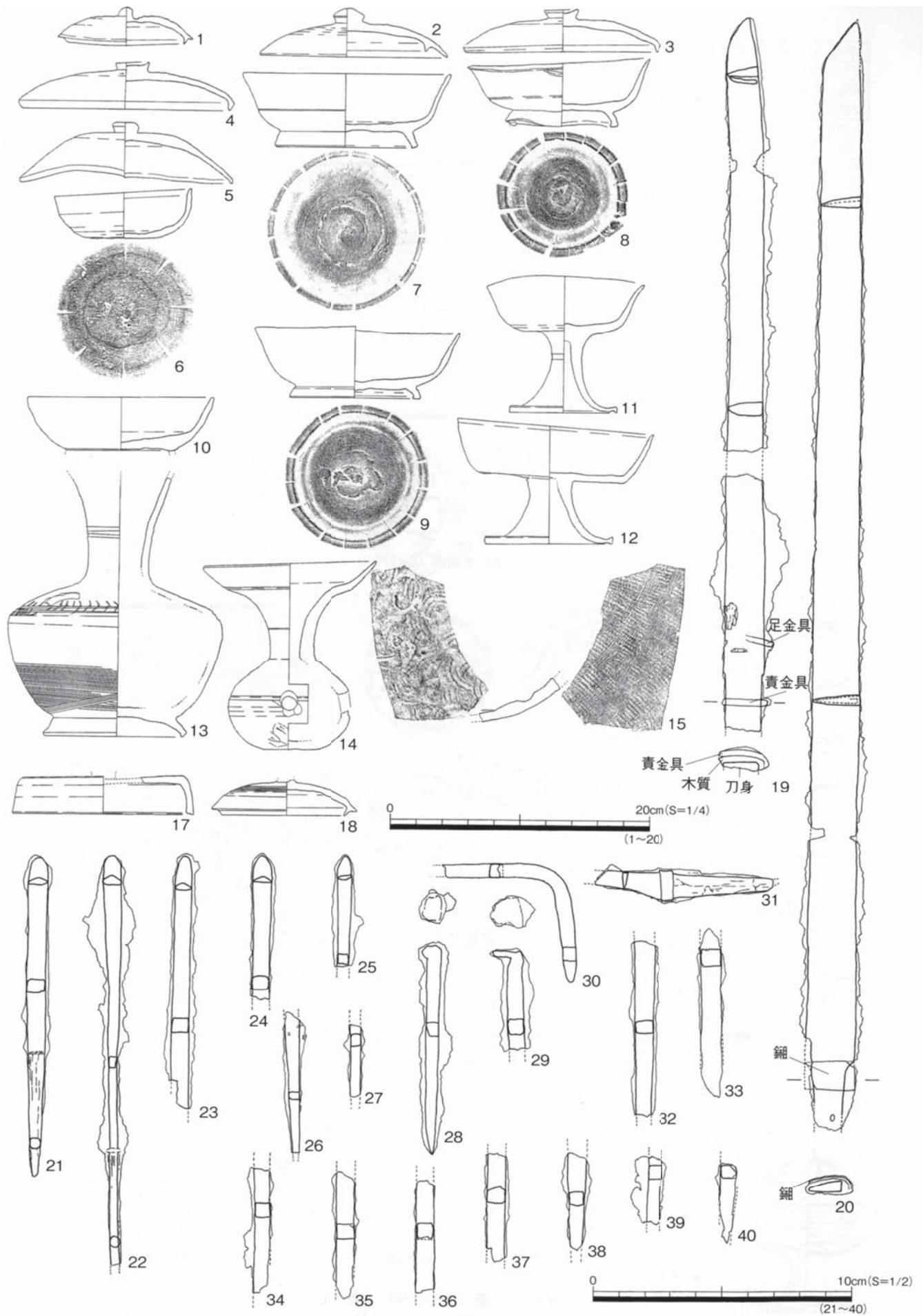


図10 高田横穴墓群（2）（榎原・藤田2011 70頁）

4. まとめ－茄立横穴の歴史的位置付け－

(1) 三隅川河口域の首長墳・横穴墓について

旧三隅町内における後期・終末期古墳は、石室墳と横穴墓がわずかに存在するだけである。

列記すると（前掲榎原・藤田2011）、三隅川水系上流（河口域から直線で約10km）の井川川にある山間の大谷古墳（浜田市三隅町井野大谷）は、平地からの比高約9mの井川川を右岸から臨む丘陵突端に築造されている。現状で直径9～10m、高さ2m程の円墳で、玄室長は最大で全長5m程と見られている。出土品は不明。一方、海浜部では海岸から250mの低丘陵北斜面に青浦古墳（浜田市三隅町岡見）が築造されている。三隅川河口域から直線で約6km、石室残存長2.8m、奥壁幅1.65m、残存高0.95mで、平面形が羽子板状になる無袖形横穴式石室の可能性が指摘されている。

三隅川河口域においては、時期・詳細不明の鉢の木古墳（消滅）のほか、消滅した石室墳の小野古墳（浜田市三隅町小野）が知られている。小野古墳は三隅川に注ぐ神元川の左岸低丘陵北斜面に築造されており、石室はかつて長さ約2m・高さ1m程度が残っていた。出土品は確認されておらず詳細は不明であるが、概ね後期後半から終末期の小規模な横穴式石室墳と考えて大過ない。茄立横穴とは直線距離で約600mと至近であるが、茄立横穴は三隅川に注ぐ石田川の右岸丘陵南斜面に位置することから、孤立的な関係性が見てとれる。同じく高田横穴群（浜田市三隅町湊浦高田）も三隅川河口部の右岸丘陵南斜面に造墓されていることから、小野古墳、茄立横穴との関係性も判然としない。なお、石室墳か横穴墓の選択については、地質的な条件（石材の確保や横穴墓に適した地質）ではなく、被葬者家族の「造墓労働力」（＝経済力）の差とする説があるが（大谷1992a・2017）、小野古墳の規模から考えても、三隅川河口域における首長墳の階層性は希薄といえる。

高田横穴群は、現段階で7穴確認されており、2穴（A群）と5穴（B群）に分かれ。出土品が残されているが、どの横穴かは特定できない。須恵器は石見6B期～8期（前掲榎原2010）の7世紀第2四半期～7世紀末葉で、残存長85.9cm（刃部長80.5cm）のカマス切先の大刀1、足金具の付属する大刀1、棘状闘のある鑿箭式の長頸鎌が5、刀子1、鉄釘複数等が報告されている（図9・10）。ところで、両横穴の平面形態は異なっており、茄立横穴は正方形に近い平面プラン、高田横穴群は、「徳利形」（田中1983）の平面プランである。しかし、茄立横穴とほぼ同時期の造墓・追葬と考えられ、遺物相が類似している点は重要である。高田横穴群は30基を数えたといわれており（前掲田中1983）、中世に存在した三隅湊を示唆する字「湊浦」に位置する。海運や漁労等を生業とする被葬者集団が想起される。

一方、茄立横穴は、詳細不明ながら鉢の木古墳の近傍にあり、至近にある海石西遺跡からは未見の官衙遺跡の存在を類推させる綠釉陶器が出土していること、近世山陰道との近距離的関係から、古代に遡って三隅川河口部の中心的な位置にあった可能性が想起される。いずれにせよ、7世紀第2四半期～7世紀末に三隅川河口域に二系列の横穴被葬者層（有力家長層）が勃興したことは事実であり、横穴数では高田横穴群の系列が優勢である。次節では出土遺物から茄立横穴の被葬者像に検討を加えたい。

(2) 環付足金具を装着した大刀を副葬した茄立横穴の被葬者像

ここでは、先述した大刀（1）図4-1について、装具の様相から当該資料の位置付けを検討し、被葬者像に言及してみたい。柄頭本体は不明であるが、環付足金具を備えていることから、豊島直博氏の研究に鑑みれば（前掲豊島2013）、木製円頭大刀であった可能性が極めて高い。結論を急げば、当該資料の環付足金具は折り返しを有することから豊島分類の短脚Cに属し、豊島編年の3期（7世紀第2四半期）に位置付けられる。3期は環付足金具が国産化（＝短脚C式）された画期で、短脚C式の環付足金具は多くが木製円頭大刀に装着され、木製円頭大刀には4つの共通点が指摘されている（前掲豊島2013）。すなわち、「①鉄本体の全長が60～80cm程度で、大刀としてはやや短い」、「②銅製鳩目金具、責金具、鍔、鞘口金具装着する」、「③板锷ではなく喰出锷を装着す

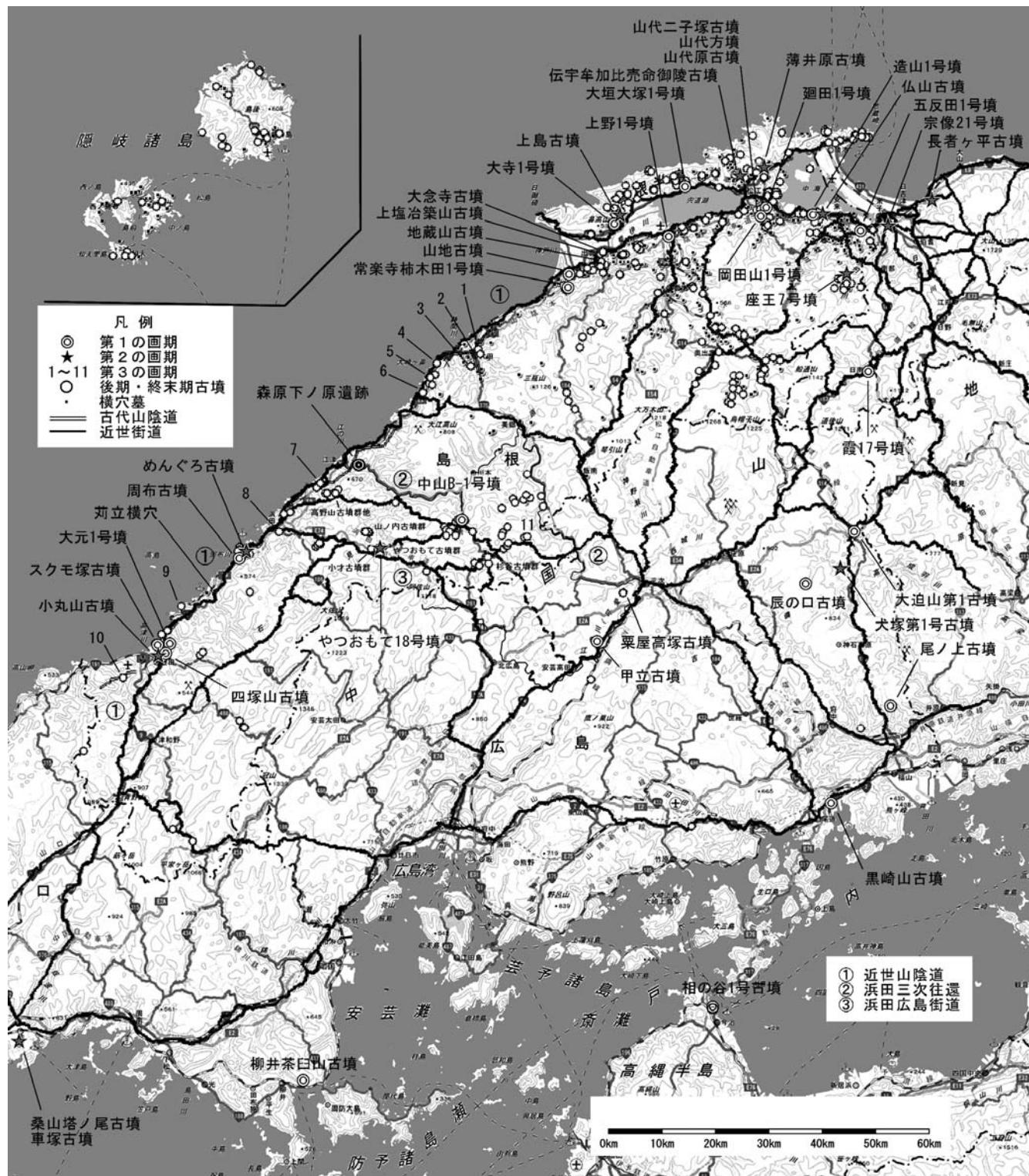


図11 石見・出雲における後期・終末古墳、横穴墓の分布と近世往還道（数字は表2に対応）

る)、「④円筒状の鞘尻金具を装着する」の4つの特徴である。当該資料はこの4つの特徴に沿うものといえる。なお、図8-2・3の鳩目金具を当該資料の柄頭に伴う鳩目金具とみれば、これは1.3cm未満の「小型」に分類され、7世紀第2四半期に位置付けられていることから(豊島2014)、年代観にも矛盾しない。また、古い方頭大刀の吊手孔付佩用金具(单脚足金具)の吊手は完全に真上に位置し、責金具との間の割り込みがほとんどなくなっている(新納1987)とされていることから、单脚足金具も当該資料に付属するものとして問題はない。また、鞘尻金具は筒状部の折り曲げと天板の蟻付けによって作られた切り込みをもたない豊島分類の蟻付け型A式(7世紀前半)に相当する(前掲豊島2014)。先述した大刀の分類(前掲臼杵1984、前掲福島2005)と併せて、当該資料は7世紀前半を上限にする年代観が与えられる。

ところで、豊島氏は3期(7世紀第2四半期)の環付足金具をもつ鉄刀(=木装円頭大刀)出現の歴史的評価について、①飛鳥池遺跡に先立つ官営工房の存在、②東海と関東に拡散する=対蝦夷政策との関連、③蘇我氏から自立した舒明朝の武器生産を説く。

この大刀(1)を佩用した茄立横穴の被葬者は、倭王権とどのような関係を結んだのであろうか。改めて、出土遺物から被葬者を取り巻く事実確認を整理すると、①大刀(1)と初葬時の須恵器の年代観がともに7世紀第2四半期の範疇にあることから、この佩用者を初葬の被葬者とみることは根拠のないことではない。また、時期の異なる須恵器や複数の耳環が副葬されていることからも、追葬が行われていることはほぼ間違いない。②茄立横穴出土の鉄鎌から九州北部との通交関係が示唆される。③短脚C式の環付足金具をもつ鉄刀は、東海・関東以外では九州北部にも分布の偏在が認められている(前掲豊島2013)。

以上を前提に想像をたくましくすれば、大刀(1)=木装円頭大刀を佩用する(初葬の)人物は、直接的な軍事行動の対象が蝦夷であったかは措くとしても、7世紀第2四半期(舒明朝期)に倭王権の軍事行動に関与した人物であった可能性が想起される。また、方頭式・圭頭式の平根鎌の副葬を積極的に評価すれば、九州北部地域の特定集団との遠距離通交を有し、あるいは彼らと共に活動した被葬者だったのかもしれない。そして、複数の大刀が副葬されていることから、追葬の人物らも継続的に倭王権と軍事的な関係性を有した可能性が考えられる。さらに附言すれば、三隅川河口域(水系)において地域を統べるような有力首長墳が不在の中で、伝統的な装飾大刀ではない新制の大刀を複数副葬している。このことからみて、広域の上位階層者(最高首長)や蘇我氏をはじめとする畿内の有力氏族を介するより、軍事的関係においてより従属性に倭王権と結び付いた山陰西沿岸部の新興家長層の姿が浮かび上がるのではないだろうか^(註4)。まさに茄立横穴は「石見各地の政治勢力が個別にヤマト政権や他地域の政治勢力と接触した」との評価(渡邊2005)を体現したものであり、高田横穴群の被葬者らもまた、その立地と遺物相に鑑みれば、国家的な軍事動員に従属した三隅川河口域を拠点とした新興の有力家長層と想像されるのである。すなわち、仕奉関係を通した倭王権の地域掌握が三隅川河口域で進展したのである^(註5)。

(3) 石見における倭王権の交通戦略とその画期

石見における古墳・横穴墓の立地を悉皆的にみれば、港津や古代山陰道推定ルート沿い、山間部においては安芸・備後への近世往還(以下、内陸ルート)沿いやその結節・分岐点に集中することが確認できる(図11)。古墳時代後期・終末期を対象にすると、石見各地の上位階層(最高首長墳上位階層)の古墳立地はとくにそれが顕著であり、水利・耕地開発域を臨む象徴的な位置に築造される場合もあった(表2)。これは、倭王権によるミヤケの設置や軍事行動にも連動した交通網整備、山間島嶼の地域掌握(地方支配)と密接に関係していることが、考えられる。石見における倭王権の交通戦略とその画期について、下記のように3段階に整理する(図11参照)^(註6)。

第1の画期(古墳時代前期後葉～末)：日本海沿岸部に、浜田市・周布古墳(74m)、益田市・大元1号墳(85m)、益田市・スクモ塚古墳(98m)の大型前方後円墳が築造される(佐伯2109、林2021)。また、内陸ルート沿

いにはC式（橋本1998）・II群（阪口2019）の方形板革綴甲が副葬された中山B-1号墳（前方後方墳・22m）が築造される。

石見の三つの前方後円墳が前期後葉～末^(註7)に築造されたとすれば、この画期は前期後半において、丹後三大古墳をはじめとした大型前方後円墳が日本海沿岸各地に広域に築造されることや（和田1997・2018）、大和北部勢力・倭王権中枢との関係を示す埴輪が山陰各地の古墳で確認されていること（高橋1994・廣瀬2015）、佐紀陵山古墳（大王墓）と相似形の前方後円墳の築造（岸本1992、大谷2011）等から、倭王権による広域的なインパクトに連動したものとして理解される。この画期に対する歴史的背景を理解する上で、大和政権の対外交渉が中国から朝鮮半島諸国に転換されるにともなって、山陰地方や丹後地方の日本海諸地域がその交渉に貢献したとする見解（高橋2010）、倭王権（佐紀政権）による対外政策（朝鮮半島への倭軍の派兵）と、これを示すものとして前期後半における大阪湾岸と丹後半島の前方後円墳の出現が指摘されている（岸本2010・2018）。そして、丹後を頂点とした日本海沿岸東部の古墳の形と規模による序列をヤマト王権内部の拡張戦略として実施された日本海沿岸地域の経営戦略と説く（前掲和田1997・2018）先駆的な指摘は重要である。石見における第1の画期は、倭王権の広域政策である日本海沿岸地域の内政拡充策と朝鮮半島交渉における丹後以西の日本海ルートの拠点形成の一つとして評価したい。さらに、注目すべきは広島県安芸高田市の甲立古墳（前方後円墳・77m）である。日本海と瀬戸内を繋ぐ内陸ルートの拠点に築造されていることから、古墳時代前期後半～末にかけての倭王権による対外交渉政策との関係が説かれ（脇坂2014、脇坂・沖田2015、脇坂2018）、埴輪から甲立古墳を「前期末頃・4世紀後半」に位置付けた高橋克壽氏は、前期後半に倭王権が「海上ルートに加えて、陸路重視の転換」した歴史的背景に、王権の体制変革があったことを説いている（高橋2015）。すなわち、中山B-1号墳は甲立古墳から周布古墳の位置する浜田市沿岸部を繋ぐ内陸ルート上に位置している。前期後半以降の方形板革綴短甲を出土する大和周辺の新興中小規模墳が、朝鮮半島の要請による軍事的関係を結んだ佐紀・馬見古墳群の勢力の強い影響下にあったとする説に鑑みれば（田中2009・2013・2018）、中山B-1号墳の被葬者も、倭王権による山陽方面（備後）から山陰西部（石見）に至る内陸ルートを抑えた軍事的新興勢力であった可能性が考えられる^(註8)。

第2の画期（古墳時代後期前葉）：MT15型式併行期の浜田市・めんぐろ古墳（円墳・15～20m）、浜田市・やつおもて18号墳（造出し付円墳・28m）、益田市・小丸山古墳（前方後円墳・52m）の築造。繼体朝における半島計略とミヤケの設置を背景とした西日本新興勢力の勃興期と考えられる（前掲仁木2019）。日本海沿岸の海運に加えて、やつおもて18号墳の築造から、第1の画期と同じく山陽側との内陸ルートも再び重要視されている。浜田市旭町の山ノ内古墳群の造墓もこの時期に開始される。

第3の画期（古墳時代後期後葉～終末期）：欽明・推古朝の画期で、日本海沿岸部、推定古代山陰道（プレ古代山陰道）ルートと内陸ルート沿いに上位階層墳（図11の1～11）が築造される。

第1の画期と第2の画期は石見西部（周布・益田）、そして内陸ルートが倭王権からの交通拠点として重要視されていることが見てとれる。第3の画期については、第1と第2の画期の交通拠点に加え、大田・仁摩・浜田・山間部に上位階層の石室墳が加わり、内陸ルート沿いで古墳（群）の造墓が盛んになる。ここで第3の画期の特徴をまとめると、①大田市静間川・三瓶川下流域（松尾2019）や仁摩町潮川下流域（仁木2020）などの一部の地域で上位階層（巨石墳）と中小規模の石室墳や横穴墓の存在から、地域的な階層性がうかがわれる。しかし、出雲のような墳丘・石室規模と装飾付大刀や馬具など副葬品の較差から解析される明瞭かつ旧郡単位の広域な階層構造（大谷晃二1999）の形成は、現状の考古資料からは析出できない。このことは、石見地域の後期古墳の武器・馬具を集成検討した吉松優希氏も、「出雲地域のような明確な階層構造を示すことは難しい」と指摘している（吉松2021）。②石見沿岸部には、上位階層の拠点が少なくとも6カ所（大田・仁摩・江津・周布（浜田）・益田）が形成される。③山陽側への交通路では、浜田市域（下府町含む）を起点とする内陸ルート（浜田広島往還・浜田三次往還に遺跡）沿いに中小の石室墳や横穴墓が集中する。そして内陸ルートの石見沿岸部の起点には上位階層

の片山古墳、備後との国境には同じく上位階層の野伏原古墳が築造される。④内陸ルートには、江津市・高野山古墳群、旭町・やつおもて古墳群、山ノ内古墳群、小才古墳群、邑南町・杉谷古墳群などの後期・終末期古墳群が形成される。とりわけ、高野山古墳群は屯倉型の開発に対応する「山の墓地」(菱田2013)である可能性が高い。これら①～④は倭王権による交通戦略と地域支配と密接に関係する現象と考えられる。ここで一つだけ附言すれば、浜田市域を起点とする内陸ルートが、石見の古墳時代における陸上交通の大動脈となっている^(註9)。このことは、浜田市下府町の上府地区(山本1972)・下府地区(藤岡1969)が「石見国府」の有力な推定地(神2010)となっていることと無関係ではあるまい^(註10)。古代山陰道から安芸国・備後国を結ぶ内陸ルートの起点となる石見国のほぼ中央に位置する「那賀郡」の浜田市域に、倭王権の論理により令制国石見「国府」の設置と那賀郡命名由来の素地があった必然性を、第3の画期から提言しておきたい。

最後に①について述べて、本節のまとめとしたい。石見全域を支配する豪族の不在が指摘されており^(註11)、横穴式石室の規模や副葬品(武器・馬具)の組成から3ランクに分解され、各ランクの被葬者は、それぞれの支配力に応じて石見各地を治め、横穴式石室のナンバー3クラスと同質の実用的な大刀や弓矢、馬具、玉類を副葬した横穴墓被葬者はナンバー2クラスの豪族の下で戦闘に参加したことが想定されている(大谷1998)。首長層の格付けとしても首肯される見解であるが^(註12)、茄立横穴が築造された7世紀第二四半期においては、倭王権は石見各地の上位階層に加え、有力家族層を直接的に軍事編成し得る段階に達したものと考えられる。この段階には推古朝期前後に築造された石見各地の上位階層墳やそれに準ずる規模の古墳築造は、浜田市下府町に所在する片山古墳(飛鳥II)を除き、ほぼ終焉を迎えることとなる。倭王権による地域支配が国造制と共に進められたものと解される。(仁木)

表2 石見における各地の最上位階層墳(TK43型式～飛鳥II期併行期)と立地
(※推定古代山陰ルートは関2015・神2010、近世往還は島根県教育委員会1999に依拠)

| 地域 | | 古墳名 | 墳形・規模 | 石室全長 | 築造期 | 副葬品 | 古代道・近世往還 |
|-----------|---|---------|--------------------|------|------------------|--|--|
| 大田 安濃郡 | 1 | 城山古墳 | 円・18～20m | 4.2m | TK43 | 不明 | プレ古代山陰道 ルート ^(註13) |
| | 2 | 加土古墳 | 不明 | 8m | TK43 | 不明 | 同上 |
| | 3 | 行恒古墳 | 円・14～17m | 6m+ | TK10 | 不明 | 出雲国からの推定 分道ルート |
| 仁摩 邇摩郡 | 4 | 赤井穴ヶ迫古墳 | 不明 | 2m以上 | TK209 | 不明 | 推定古代山陰道 ルート |
| | 5 | 明神古墳 | 円・20m | 10m | (TK43) ～TK209 | 圭頭大刀・鉄鎌・ 鉄斧・鉄鎌・刀 子・銅鏡・耳環・ 須恵器 | 推定古代山陰道 ルート、「邇摩郡 家」・「詫農駅」 推定地近在 |
| | 6 | 鳥井原古墳 | 不明 | 不明 | TK209 | 双龍環頭大刀・馬 具・玉類 | 推定古代山陰道 ルート |
| 江津 那賀郡 | 7 | 青山古墳 | 円・12m(前方 後円18m) | 8m | TK209 | 圭頭大刀・鉄鎌・ 鉄斧・鉄鎌・刀 子・銅鏡・耳環・ 須恵器 | 推定古代山陰道 ルート |
| 浜田 那賀郡 | 8 | 片山古墳 | 方墳・12m | 6.4m | 飛鳥II | 不明 | 推定古代山陰道・ 浜田三次往還・浜 |

| | | | | | | |
|-----------|----|--------|---------------------------------------|------------------|-----------|---|
| | | | | | | 田広島往還ルート、「石見国府」推定地近在 |
| 益田 美濃郡 | 9 | 鶴ノ鼻古墳群 | 前方後円・23～27m (D-2号墳ほか) 方・15m (50号墳) | 5.2m (17号墳ほか) | TK43～飛鳥II | 単龍環頭大刀？(D-2号墳)、鉄鎌・鉄刀・馬具・装身具など (E-4号墳ほか) |
| | 10 | 白上古墳 | 円・12m | 8m+ | TK209 | 不明 |
| 邑南 邑智郡 | 11 | 野伏原古墳 | 円・10m+ | 8m | TK209 | 銀装三墨環頭大刀・鉄鎌・馬具 |

おわりに

今回の報告は須恵器以外の主要な副葬品である金属器を資料化したものであるが、若干の課題も残る。須恵器資料については、概要報告の実測図には表現されていない調整などが確認できるほか、耳環以外の装身具には水晶製切子玉と青色ガラス小玉もある。本来、これらの総合的な資料化と検討を通じて、薺立横穴の評価を行う必要がある。また、史資料の横断的な地域検討と倭王権をはじめとする他域との深浅からみた石見の古墳時代像を考究する継続的な課題が残されていることを明記して、擲筆する。(仁木・吉松)

謝 辞

本稿を成すにあたり、下記の方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

岩崎孝平、岩本真実、上山晶子、幸村康子、榎原英博、澤田正明、高橋克壽、田中 大、林 健亮、林 弘幸、東森 晋、廣江耕史、深田 浩、藤田大輔、真木大空、松山智弘、吉松優希、渡邊真二（敬称略・五十音順）

島根県古代文化センター

島根県埋蔵文化財調査センター

島根県立古代出雲歴史博物館

浜田市教育委員会文化スポーツ課

松江市立玉作資料館

松江市まちづくり文化財課

【註】

(1) 白杵分類による形制の編年において、均等両闕の茎尻はさほど重要な要素とはならないとされている。(前掲臼杵1984の62頁)

(2) 鈴木一有氏は、古墳時代後期後葉から終末期の方頭式の有窓鉄鎌が九州北部や岡山平野以外にも多くの事例が散見できることをあげ、方頭式の鎌身形態は朝鮮半島からの強い影響下に日本列島において成立した武装にかかわる変革を象徴するものと評価する。また、古墳時代終末期（鈴木氏は飛鳥I新相～V期とする）における方頭式の有窓鉄鎌は、奈良時代との連続性が高いことを指摘している（鈴木2003）。方頭式の有窓鉄鎌と通有の方頭式鉄鎌が吉備から出雲への一元的な拡がること、両地域の経由地周辺に分布が集中することを明らかにした本稿の立場から付言すれば、鈴木氏が説く列島規模の鉄鎌武装の変革に、備中北部の鉄生産を背景にした吉備の方頭式鉄鎌が影響を及ぼした可能性を想像する。

(3) 新納泉氏は、6世紀後半以降、北房地域が鉄生産の発達および吉備中心部の近接地、交通の要衝といった立地条件から蘇我氏など畿内中心部との結びつきを急速に深めたことを指摘している（新納2001）。

(4) 石見における古代氏族研究を参考すれば、九世紀の史料とから、薺立横穴が位置する那賀郡は久米氏が郡領氏族として有力で、隣接する邇摩郡は伊福部氏が石見東部の国造氏、同じく美濃郡の郡領氏族は檜前氏が推定されている（平石2010）。この三氏は令制以前から中央の大伴造大伴氏と統属関係にあった軍事氏族で、5世紀後半以降の対半島交渉（外征）の活発化等で台頭した大伴氏により、石見地域への三氏の進出・地域首長層との関係構築・部民設定が計画的に行われた可能性

にも言及されている（吉松2019）。ここで茄立横穴の被葬者を久米氏の後裔に比定する意図はないが、考古学的にも石見沿岸各地は日本海西部の海運を担う倭王権の伝統的な対外交渉ルートであることを踏まえれば、軍事に長けた氏族の活躍が後代の史料から考察されることは、示唆的である。

- (5) 中国山間部の安芸国南部・北部、備後国北部における7世紀第2四半期以降の比較的小規模な横穴式石室墳（全長6m前後）から巨石墳出土と同種の装飾大刀（環付足金具）と馬具が出土する例があることから、環付足金具の平準化と地域小首長の官人化、ヤマト王権の中央集権化の進展が説かれている（新谷2018）。
- (6) 今回提示する画期に若干の論点を補足しておきたい。三角縁神獸鏡の製作年代に基づく区分から見れば、前期中葉（岩本III・IV期＝中四国前方後円墳研究会編年のIII・IV期）に位置づけられる益田市の四塚山古墳は、山陰において伯耆の馬ノ山4号墳、出雲東部の造山1号墳と同時期の三角縁神獸鏡が副葬された古墳で（岩本2011）、この段階（時代区分）は三角縁神獸鏡の分布が最も広域に及び、倭王権が諸地域との関係構築を広域に意図したものと評価されている（岩本2020）。馬ノ山4号墳と造山1号墳は、三角縁神獸鏡以外の古墳副葬品をはじめとするその他の要素から中四国前方後円墳研究会編年のV期（前期後葉）の築造と位置付けられており（松山2018）、四塚山古墳は住宅地開発で墳形やその他詳細が全く不明であるが、V期まで下がる築造の可能性を完全には否定することはできない。また、中四国前方後円墳研究会編年を軸にすれば、備後と出雲を結ぶ中国山間部に位置する広島県福山市の尾上古墳（IV～V期）、広島県庄原市の大迫山第1号墳（筒形銅器、IV期）、鳥取県日南の霞17号墳（青色ガラス勾玉副葬、VI期）も、辰の口古墳（V～VI期）や甲立古墳（V～VI期）、中山B-1号墳（IV～V期）と同じく、前期後半～中期初頭の倭王権の本州西部の内陸交通政策に関する前方後円（方）墳と推察することが可能である。要するに、本稿における第1の画期は前期後葉＝4世紀中頃の倭王権による対外交渉の拡大期からそれを主導した佐紀盾列古墳群西群の終焉に対応する（中四国前方後円墳研究会編年のIV～VI期＝前期後葉～中期初頭（＝前期末、5世紀初頭））倭王権との広域的な通交関係の構築を提示するものである。「時代区分」と（古墳築造の）「時期比定」を区別する課題と、前期後葉（大賀前V期＝中四国前方後円墳研究会編年IV期）における副葬品組成の変化を佐紀古墳群の成立と結びつける議論が否定されている見解（大賀2013）もあり、今回提示する第1の画期は今後も多角的な検討を要するものであることを記しておく。
- もう一つは、古墳時代中期における画期である。出雲東部以西の山陰西部沿岸に短甲出土古墳がない情況を踏まえながら、倭王権から丹後・因幡・伯耆・出雲（東部）の日本海沿岸ルートを経て隱岐諸島経由で韓半島に向かう通交ルートの存在が指摘されている（松尾2021）。丹後以西の日本海沿岸部における短甲副葬古墳が、出雲東部と中国山間部の三次、瀬戸内の安芸地域にする集中することを踏まえれば（橋本・鈴木2014）、中期古墳自体の築造が低調な石見の情況は、倭王権による山陰東部沿岸の倭王権－韓半島ルートと出雲－三次－安芸の内陸ルートの重視を暗示するものかもしれない。後考を俟ちたい。
- (7) 中四国前方後円墳研究会編年では、VI期（4世紀第4四半期の「中期初頭」）とされる。
- (8) 方形板革綴短甲の年代観については、古墳の編年研究においても概ね前期中頃～後半の標識資料に位置付けられている（岸本2010・中四国前方後円墳研究会編2018）。ちなみに岸本直文氏の前期古墳編年では、方形板革綴短甲の出現は前6期＝「4世紀中頃を含む第3四半期」（岸本2010）に位置付けられている。中山B-1号墳例は、中四国前方後円墳研究会編年では前期中頃のIV期（4世紀第2四半期頃（岩本2018））の基準資料とされているが、阪口英毅氏の分類ではI群より後出するII群にあたる資料であることから、ここでは中四国前方後円墳研究会編年のV期（4世紀第3四半期）に位置付け、古墳の築造（時期比定）は4世紀第3四半期を上限と考えておきたい。
- (9) 古墳時代後期・終末期における内陸ルートの重要性の拡大は、出雲山間部にもみることができる（図11参照）。また、長門国の山陰沿岸部にも装飾付大刀を出土する石室墳や横穴墓等の上位階層が存在することから、日本海沿岸部の交通ルート（プレ古代山陰道）が広域（山陰道五か国）に形成された可能性を想定する。なお、中国地方最大の大河である江の川が、古墳時代全期を通して山陽側との重要な交通ルートであった可能性は、古墳・横穴墓の分布からは積極的に認めがたい。河口部に上位階層の首長墳が皆無であることもその根拠の一つである。ただ、遺跡の分布が希薄な江の川河口域において、河口から約5km遡った江津市・森原下ノ原遺跡は注目される。古墳時代前期の石釧や後漢鏡のほか、古墳時代中期の手捏土器等をはじめとする多量の土師器の出土が認められ、隣接する森原神田川遺跡からも後期後半を中心とした須恵器・土師器が出土している。上流部（山陽側）との相互交通の拠点というより、日本海ルートの海運と沿岸部東西の陸上交通（プレ古代山陰道）における重要な交通拠点（渡河点）であったとことを反映している可能性がある。
- (10) 石見国府の推定地候補としては、浜田市国分町の唐鐘集落を想定する説もある（石井1986）。ところで、古代山陰道は石見国府の付設駅として伊甘駅が終点であるが、『延喜式』には長門国で15の駅家があり、厚狭駅から山陽道を分かれて10駅が石見国に達する支路である山陰道連絡路（石見路）があり、長門国の東端に位置する小川駅から伊甘駅までは、およそ60kmである（武部2005）。『延喜式』には石見国の駅家が5駅なので、終点の伊甘駅以西から小川駅までは、史料に駅家はない。石見国府から長門国境までの間に約16km毎に浜田市周布・浜田市三隅町古市場・益田市益田・益田市白上の4駅を想定する意見もあるが（矢富1964）、奈良時代にあった長門国府から小川駅を経て石見国府に向かう経路（武部氏の指摘

する山陰道連絡路（石見路）は、平安初期の律令再建期に廃止されたと想定する見解がある（前掲神2010）。なお、神氏は益田市高津川以西で古代山陰道の痕跡を報告している（神2005）。

(11) 文献史学からも、7世紀の令制国石見を統括するような「石見国造」の存在について否定的な見解が示されており（前掲平石2010・前掲吉松2019）、「石見地域にはおそらく先行する地域首長の族制的結合（=国造のクニ）は存在せず、首長が割拠している状況」（前掲平石2010）と考えられていることは、6世紀後葉～7世紀初頭の首長墳の分布状況とも響きあう。なお、「石見国府推定地」・「石見国分寺」の近在する片山古墳（飛鳥II期）は当該期において最大の石室墳であり、外護列石を有する一辺12m、高さ5mの終末期方墳であることから、石見最後の最高首長墳として位置づけられる。その被葬者を石見国造に比定できるのか、後考を俟ちたい。

(12) 大谷氏の見解は、群集墳の分析から古墳時代後期における軍事的構成を説いた新納泉氏の視点に通底する（図12）。すなわち、装飾付大刀と馬具に直刀や鉄鎌を副葬する最上位階層、続いて馬具と鉄鎌を副葬する階層、直刀と鉄鎌を副葬する階層、鉄鎌のみ副葬する階層のヒエラルキーである。また、装飾付大刀を副葬する被葬者は、それぞれの地域で軍事的頂点を占める階層で、伝統的な墓制とは異なる横穴墓への装飾付大刀の副葬は、在地首長の権力を弱体化させるため倭王権が打ち込んだクサビとも考えられている（新納1983）。

本稿は、大谷氏が石見各地域の首長墳を横断的に整理して導き出した階層性は、倭王権の軍事的構成と後期後葉の古墳秩序（図12のC型・和田1998・2018）に同調するものと解している。石見各地における上位階層は、墳丘や石室規模の大ささで、動員力や経済力の実力が推し量られるが（大谷1992b）、現状の考古資料から上位階層の格付けはできるが、実力を及ぼす範囲（=地域の階層性）は、小規模な沖積平野を擁する限定的な地域の解析で収束する（大田・仁摩）。しかし、各地の上位階層はその実力に応じて下位階層を動員できたことは、想像に難くない。ここで、この上位階層を頂点とするような階層性や影響を及ぼす範囲を証明する状況証拠として、人・モノ・情報の陸運・海運を担った古代水上交通・陸上交通ルートに沿うような中小規模の石室墳や横穴墓の造墓状況や較差に注目したい。すなわち、石見各地の上位階層は、各個において実力範囲（=地域の階層性）の差はあるにせよ、倭王権による軍事的構成と秩序という点において、各上位階層間で下位層を含めた広域なネットワークを形成した可能性を想定する。例えば、推古朝期に築造された邑南町・野伏原古墳の上位階層は、安芸・備後国境付近における内陸ルートの下位階層を軍事的に動員できる実力、そして倭王権を介した石見・安芸・備後の上位階層間のネットワークを有していた可能性が考えられる。山間部（内陸ルート）の古墳・横

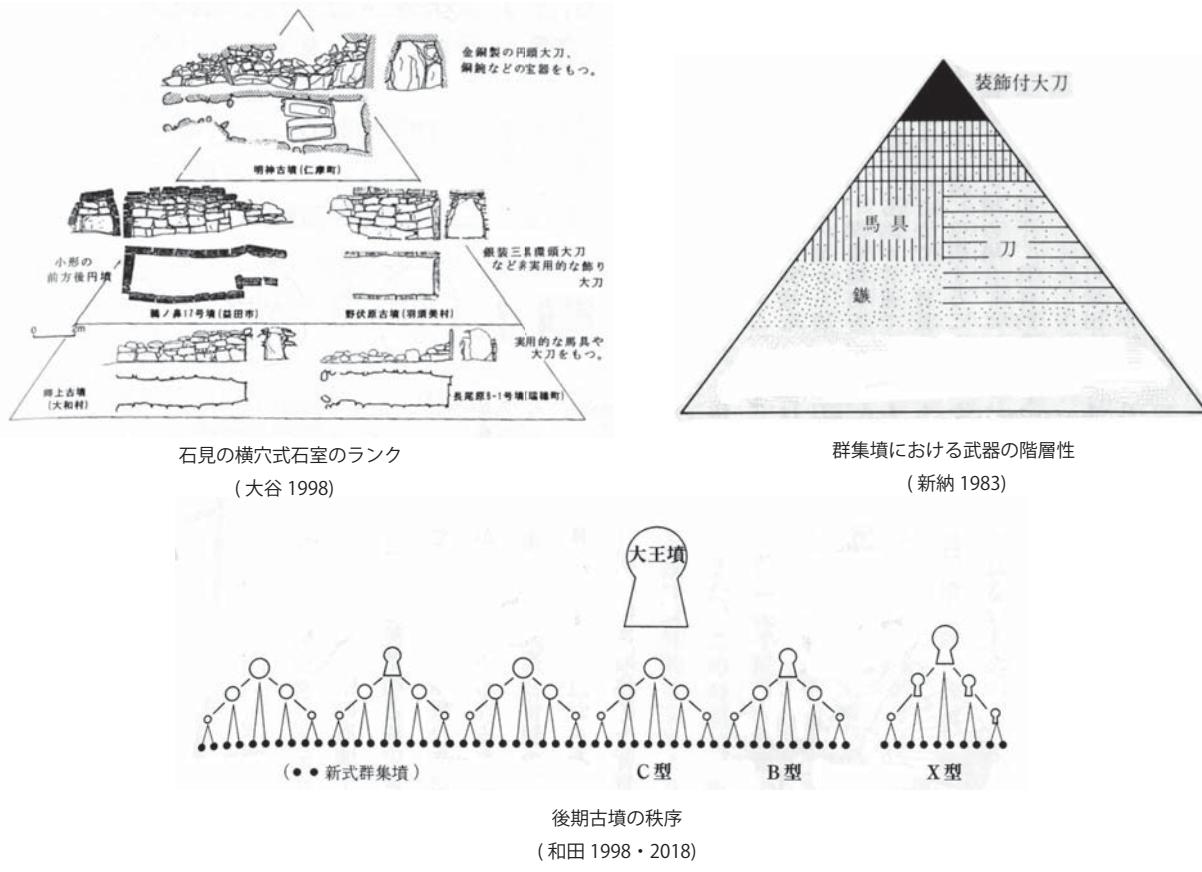


図12 古墳時代後期における石見の軍事的編成と古墳の秩序

穴墓から、馬具の副葬が目立つことが指摘されていること（前掲吉松2021）、江の川上流域（邑南町）の狭長な無袖式石室の地域性（吾郷1991）は、陸運と地域間のネットワークを反映しているのかもしれない。「大きな平野がなく山また山という石見の地形が石見という地域概念、政治的統一を阻んだ要因であった」（渡邊2005）とは異なる位相で、石見各地の政治勢力を繋いだ倭王権の地域支配と交通施策が進行したものと思量される。すなわち、倭王権により分節化された石見の古墳時代後期の秩序（C型）は倭王権により、他律的にネットワーク化されていたのであろう。その最たるケースが出雲と吉備を結ぶプレ古代交通路の整備と通交であった（第3章・図7参照）。

(13) 大田市中心部の『延喜式』段階の古代山陰道ルートについては、松尾2019に依拠しているが、大化前代以前のプレ古代山陰道を推定すれば、石見に向けて西進する古代山陰道は飯森山の手前からは南下し、飯森山南麓の台地に至ると西進し、三瓶川を渡河して古代山陰道に合流すると推定される。飯森山の南東側に城山古墳・加土古墳が位置し、三瓶川を渡河すると、南側の低丘陵斜面に複数の横穴墓が築造されていることを根拠として想定したものである。

【引用・参考文献】

- 吾郷和宏1991「江の川中流域における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会
 池淵俊一2019「出雲平野における6・7世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集第22集）
 石井 悠1986「古代石見の役所跡について」『山陰考古学の諸問題』（山本清先生喜寿記念論集）山本清先生記念論集刊行会
 伊藤徳広2018『海石西遺跡 角落し遺跡 回り田遺跡 近世山陰道（馬橋地区） 神出西遺跡』（一般国道9号（三隅・益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書）島根県教育委員会
 岩本 崇2011「島根県益田市四塚山古墳群出土の三角縁神獣鏡と「同範鏡」」『島根大学法文学部紀要社会文化学科編 社会文化編集』第7号
 岩本 崇2018「古墳時代前期暦年代の試論」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会編 六一書房
 岩本 崇2020「第4節 三角縁神獣鏡の分配・保育と社会的意義」『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』 六一書房
 岩本真実2019「石見地域における須恵器の編年と地域性－「石見型須恵器」再考－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集第22集） 島根県古代文化センター
 白杵 熱1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX－古墳文化研究会－
 宇野慎敏2008「北部九州における古墳時代後期の装身具－福岡県を中心に－」『後期古墳の再検討』（第11回 九州前方後円墳研究会 佐賀大会 発表要旨・資料集）九州前方後円墳研究会
 大賀克彦2013「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨』 第13回播磨考古学研究集会実行委員会
 大谷晃二1992a「山陽地域の横穴墓の諸問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会委員会
 大谷晃二1992b「石見地域の古墳文化～地域の古墳の教材化を目指して～」『研究紀要』第17号 島根県立浜田高等学校
 大谷晃二1998「解説 第1部 原始・古代の石見」『八雲立つ風土記の丘』No.147・148・149号合併号 島根県立八雲立風土記の丘
 大谷晃二1999「上塙治築山古墳をめぐる諸問題」『上塙治築山古墳の研究』島根県古代文化センター
 大谷晃二2011「3 山陰」『講座日本の考古学7 古墳時代 上』青木書店
 大谷晃二2017「山陰・北陸・出雲地方を中心いて」『日本考古学協会2017年度宮崎大会 研究発表資料集』日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会
 尾上元規1993「古墳時代鉄鎌の地域性－長頸式鉄鎌出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
 尾上元規1995「古墳時代後期における鉄鎌の地域形成について－岡山県南部を例としてみた鉄器生産の画期－」『古代吉備』第17集 古代吉備研究会委員会
 岸本直文1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号 考古学研究会
 岸本直文2010「第7章 玉手山1号墳と倭王権」『玉手山1号墳の研究』（大阪市立大学考古学研究報告第4冊）大阪市立大学日本史研究室編
 岸本直文2018「倭王権と倭国史をめぐる論点」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集
 小島 篤2008「九州古墳時代後期の埴輪生産」『後期古墳の再検討』（第11回 九州前方後円墳研究会 佐賀大会 発表要旨・資料集）九州前方後円墳研究会
 国土交通省中国地方整備局・国土交通省国土地理院2001『中国地方の古地理に関する調査 調査図集』
 斎藤俊也2000「遺跡が語る石見の古代〈71〉第4章古墳時代」『山陰中央新報』2000年（平成12年）3月7日（火曜日）掲載記事 山陰中央新報社
 横原博英2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』

島根県古代文化センター

- 榎原博英・藤田大輔2011『島根県浜田市遺跡地図Ⅲ（三隅自治区）史跡 石見国分寺跡（塔東側の確認調査）平成21年度 市内遺跡発掘調査報告書』浜田市教育委員会
- 阪口英毅2019『古墳時代甲冑の技術と生産』同成社
- 寒川史也2016「透かしをもつ有茎平根式鉄鎌について」『塚段古墳・坂口古墳』岡山市教育委員会
- 島根県教育委員会1999『島根県歴史の道調査報告書第九集』
- 神 英雄2005「石見の古代山陰道」『第33回 山陰考古学研究集会 山陰における古代交通遺跡』資料集
- 神 英雄2010『柿本人麻呂の石見』自照社出版
- 新谷武夫2018「安芸・備後の装飾大刀編年」『芸備』第50集 芸備友の会
- 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鎌について」『櫛原考古学研究所論集』第八 櫛原考古学研究所
- 鈴木一有2003「後期古墳に副葬される特殊鉄鎌の系譜」『研究紀要第10号』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 関 和彦2015『古代石見の誘い道 人麻呂と神々と道』今井出版
- 高橋克壽1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』41巻第2号 考古学研究会
- 高橋克壽2010「山陰の古墳時代前期の埴輪の特質」『遠古登攀』遠山昭登君追悼考古学論集
- 高橋克壽2015「第4章 出土埴輪についての検討 2. 埴輪の編年と配置の意義」沖田健太郎ほか2015『甲立古墳』安芸高田市教育委員会・公益財団法人安芸高田市地域振興事業団
- 瀧瀬芳之1991「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』—設立10周年記念論文集—財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中晋作2009『筒形銅器と政権交代』学生社
- 田中晋作2013「④社会 ②軍事組織」『古墳時代の考古学』同成社
- 田中晋作2018「古墳時代前期の政権構造について—大和盆地東南部地域の勢力から佐紀・馬見古墳群の勢力へー」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会編 六一書房
- 田中義昭1983「石西地方における横穴墓の形態と時期」『山陰文化研究紀要』23 島根大学
- 辻村純代1997「耳環考」『古文化談叢』第39集 九州古文化研究会
- 土屋隆史2018「古天神古墳出土鉄鎌の位置づけ」『古天神古墳の研究』島根大学考古学研究室調査報告第17冊 島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会
- 豊島直博2013「環付足金具をもつ鉄刀の編年」『考古学研究』第60巻第3号 考古学研究会
- 豊島直博2014「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』第98巻第3号 日本考古學會
- 中村太一2011「出雲をめぐる陸上交通とその多様性」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター
- 新納 泉1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻3号 考古学研究会
- 新納 泉2001「第6章 11 定東塚・西塚古墳の歴史的位置」新納泉・光元順編『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室
- 仁木 聰2017a「継体・欽明朝における出雲の池溝開発—東西出雲成立の史的画期—」『塚口義信先生古稀記念 日本古代学論叢』同記念会 和泉書院
- 仁木 聰2017b「『出雲国風土記』神門郡条記載の「池」と大念寺古墳の時代」『季刊文化財』第140号 島根県文化財愛護協会
- 仁木 聰2019「継体・欽明朝における出雲の画期」『国家形成期の首長権と地域社会構造』(島根県古代文化センター研究論集第22集) 島根県古代文化センター
- 橋本達也1998「縦矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」『青丘学術論集』第12号
- 松山智弘2018「山陰」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会編 六一書房
- 林 弘幸2021「古墳時代前半期の石見地域の古墳の特色」『島根考古学会2021年12月例会発表資料』島根考古学会
- 菱田哲郎2013「7世紀における地域社会の変容 古墳研究と集落研究の接続をめざして」広瀬和雄編『[共同研究] 新しい古代国家像のための基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第179集
- 廣瀬 覚2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 平石 充2010「山陰西部地域の豪族と国制の成立」『出雲国形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター編
- 福島雅儀2005「古代金属装刀の年代」『考古學雑誌』第89巻2号 日本考古學會
- 藤岡謙二郎1969『国府』吉川弘文館
- 本田博之2013「十五・十六世紀山陰地域における流通経済と貿易」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター研究論集 第11集
- 本田博之2017「中近世移行期西日本海地域の流通と海辺領主」『企画展石見の戦国武将—戦乱と交易の中世—』島根県立石見美術館
- 水野敏典2013「⑤鉄鎌」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社

- 松尾充晶2002「第4章〈装飾付大刀〉」『下布施横穴墓群 案久寺遺跡』(尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書4)木次町教育委員会
- 松尾充晶2019「古墳時代の開発と地域形成－石見国安濃郡を素材に－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』(島根県古代文化センター研究論集 第22集) 島根県古代文化センター
- 松尾充晶2021「倭と韓半島をつなぐ「海の道」－日本海側の短甲副葬古墳の検討から－」『技と慧眼－塚本敏夫さん還暦記念論集－』塚本敏夫さん還暦記念論集事務局
- 松木武彦2007『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会
- 橋本達也・鈴木一有2014『古墳時代甲冑集成』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 安来市体育文化振興財団 和鋼博物館2001「付編 伊賀武社境内横穴墓・川子原横穴および寺谷尻古墳から出土した鉄刀・鉄鎌の分析調査」杉原清一ほか2001『伊賀武社境内横穴墓』仁多町教育委員会
- 矢富熊一郎1964『石西国道史』建設省浜田工事事務所
- 山本 清1972「国府」『新修島根県史』通史編1
- 吉松大志2019「国家形成期の石見地域と地域間関係－佐波をてがかりに－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』(島根県古代文化センター研究論集第22集) 島根県古代文化センター
- 吉松優希2021「石見地域の古墳時代後期の武装」『島根考古学会2021年12月例会発表資料』島根考古学会
- 脇坂光彦2014「甲立古墳造営の地理・歴史的背景」『芸備』第44集 芸備友の会
- 脇坂光彦・沖田健太郎「第5章 総括」沖田健太郎ほか2015『甲立古墳』安芸高田市教育委員会・公益財団法人安芸高田市地域振興事業団
- 脇坂光彦2018『境目・広島県の古墳文化－前方後円墳が語る地域史－』溪水社
- 渡邊貞幸2005「2章 地域王権の時代」『島根県の歴史』山川出版
- 和田晴吾1997「三大古墳と日本海沿岸の古墳」『日本海三大古墳がなぜ丹後につくられたのか』第3回加悦町文化財シンポジウム 加悦町教育委員会
- 和田晴吾1998「古墳時代は国家段階か」都出比呂志・田中琢編『権力と国家と戦争』(『古代史の論点』第四巻) 小学館
- 和田晴吾2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館

【遺跡引用文献】（【引用・参考文献】を除く）

(鳥取県)

- 内ノ倉横穴墓（19号墓）：影山1989『発掘調査報告書 内ノ倉横穴墓群II』日南市教育委員会報告書3
- 浦富古墳群（3号墳）：岩美町2006『新編岩美町誌』、中原斉ほか1988『浦富3号墳発掘調査報告』(岩美町文化財調査報告書第10集) 岩美町教育委員会、中島伸二・水石明夫2001『浦富6号墳発掘調査報告』(岩美町文化財調査報告書第23集) 岩美町教育委員会
- 日下5号横穴：吾郷信一・小原貴樹・藤原裕子1992『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会 日下古墳群調査団
- 坂本横穴墓群：日南町教育委員会2003『坂本横穴墓群発掘調査報告書』日南町教育委員会文化財報告書第12集
- 佐川古墳群（5号墳）：中原斉1986『佐川遺跡群』(鳥取県教育委員会文化財団調査報告書20) 財団法人鳥取県教育文化財団
- 石州府古墳群（59号墳）：小原貴樹・下高端哉1989『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会 石州府古墳群調査団
- 里仁古墳群（33号墳）：中原斉・山耕雅美1985『里仁古墳群』(鳥取県教育文化財団調査報告書18) 財団法人鳥取県教育文化財団
- 西浦山古墳：東方仁史2006「鳥取市国府町西浦山古墳出土資料について」『鳥取県立博物館研究報告』第43号
- 山ノ神古墳群（5号墳）：岩美町教育委員会1991『山ノ神5号墳発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書第15集
- (島根県)
- 青山古墳：梅木茂雄2003『青山古墳』(民間開発事業に伴う青山II遺跡発掘調査報告書) 江津市教育委員会
- 赤井穴ヶ迫古墳：山本 清1962「古墳の示す三瓶周辺の文化」『山陰文化研究紀要』三号
- 伊賀武社境内横穴：杉原清一・野津 旭・藤原友子2001『伊賀武社境内横穴墓』仁多町教育委員会(埋蔵文化財調査室)
- 鵜ノ鼻古墳群：神柱靖彦編2015『益田市内における古墳の調査 金山古墳・鵜ノ鼻古墳群・
- 大元1号墳：佐伯昌俊2019『大元古墳群－発掘調査報告書－』益田市教育委員会
- 北長迫横穴墓群（島根県古代文化センター調査研究報告書49）島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 大谷原古墳：岩崎仁志・橋本雅夫1980『島根県埋蔵文化財調査報告書』第XVII集 島根県教育委員会

- 片山古墳：大谷晃二1993「付 片山古墳測量調査報告」『下府廃寺跡』浜田市教育委員会
- 加土古墳：島根県大田市1968『大田市誌 十五年のあゆみ』島根県大田市
- 神門横穴墓群第10支群：石原 聰2021『神門横穴墓群 第10支群 十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 上塩治横穴墓群第3支部：須賀照隆編2018『上塩治横穴墓群第3支部』出雲市の文化財報告36号 出雲市教育委員会
- 上塩治横穴墓群第6支部：門脇俊彦1980『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会
- 苅立横穴：三隅町1971『三隅町誌』、三隅町教育委員会1993『三隅町の文化財』
- 上塩治築山古墳：坂本豊治編2018『上塩治築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研究紀要第6集 出雲弥生の森博物館
- 小才古墳群：松本岩雄・足立克己・角田徳幸（編）1992『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書IV』島根県教育委員会
- 小丸山古墳：木原 光1990『小丸山古墳発掘調査報告書』益田市教育委員会
- 城山古墳：島根県大田市1968『大田市誌 十五年のあゆみ』島根県大田市、野島智美実2021『行恒古墳・城山古墳』（大田市埋蔵文化財調査報告書第38集）大田市教育委員会
- 下布施横穴墓：坂本諭司2002『下布施横穴墓群 案久寺遺跡』（尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書4）木次町教育委員会
- スクモ塚古墳：仁木聰・増田浩太・丹羽野裕・池淵俊一2008『大垣大塚古墳群（附編スクモ塚古墳）』（島根県古代文化センター調査研究報告40）島根県教育庁文化財課古代文化センター・埋蔵文化財調査センター
- 周布古墳：榎原博英2008『史跡周布古墳 蔽地宅後古墳 史跡金田1号墳 平成14・15・18年度 市内遺跡発掘調査報告書』浜田市教育委員会
- 空山古墳群：柳浦俊一1985「江津空山1号墳出土の土器」『島根考古学会誌』第2集 島根考古学会
- 高野山古墳群：柳浦俊一1984「石見における群集墳の一例」『島根考古学会誌』第1集 島根考古学会
- 中山B-1号墳：前島已基・松本岩雄・三宅博士1977『中山古墳群発掘調査概報』石見町教育委員会、中田健一1994『中山古墳群発掘調査報告書－第3次－』、中田健一1994『中山古墳群－平成5年度実態調査概要報告書－第3次－』石見町教育委員会
- 林43号墳：勝部 衛1986「八束郡玉湯町林古墳群第43号古墳の調査」『八雲立つ風土記の丘』No.79号 島根県立八雲立風土記の丘
- 古天神古墳：岩本崇編2018『古天神古墳の研究』島根大学考古学研究室第17冊 島根大学法文学部考古学研究室古天神古墳研究会
- 明神古墳：島根県文化財愛護協会1987「新指定文化財二件」『季刊文化財』五七号、仁木聰2020「大田市 明神古墳出土資料について」『古代文化研究』第29号 島根県古代文化センター
- めんぐろ古墳：松尾充晶編2009『めんぐろ古墳の研究』（島根県古代文化センター調査研究報告42）島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 森ヶ曾根古墳：川口幸子1986『周布小建設予定地内埋蔵文化財（森ヶ曾根古墳）発掘調査報告書』浜田市教育委員会
- 森原神田川遺跡下ノ原地区：今福拓哉・宮本正保ほか編『森原神田川遺跡下ノ原地区』（一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書）島根県教育委員会
- 森原下ノ原：東森晋2020「1. 一級河川江の川直轄河川改修事業（森原地区）に伴う発掘調査」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報28－令和元年度－』島根県教育委員会、真木大空2021「4 一級河川江の川直轄河川改修事業（森原地区）に伴う発掘調査」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報29－令和2年度－』島根県教育委員会
- やつおもて古墳群（18号墳）：角田徳幸ほか編1992『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書IV』島根県教育委員会
- 山ノ内古墳群：松本岩雄1989『山ノ内14号墳発掘調査報告書』、旭町教育委員会1991『山ノ内28号墳発掘調査報告書』、今田修二1994『山ノ内古墳群』（旭町埋蔵文化財調査報告書3）旭町教育委員会
- 行恒古墳：島根県矢上高校古墳研究会2012「大田市行恒古墳の測量調査報告」『島根県考古学会誌』第29号 島根県考古学会、野島智美実2021『行恒古墳・城山古墳』（大田市埋蔵文化財調査報告書第38集）大田市教育委員会
(広島県)
- 甲立古墳：沖田健太郎ほか2015『甲立古墳』安芸高田市教育委員会・公益財団法人安芸高田市地域振興事業団（福岡県）
- 釘崎3号墳：八女古窯跡群調査団1971『菅の谷窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅲ
- 正籠3号墳：平ノ内幸治1990『正籠古墳群』（宇美町文化財調査報告書第8集）

【図版】

図1・2・4・5・8：筆者実測

図2の空撮写真（1948/02/20（昭23）米軍撮影）

写真の出典 国土地理院ウェブサイト

<https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1801857&isDetail=true>

図3・図9・10：榎原・藤田2011に一部加筆

図6：-12の筆者実測を除き、各報告書より転載

図7：中村2011の図2「出雲一周辺諸国間の陸上交通路（模式図）」を一部改変して作成。鉄鎌は出土点数を表すものではない。紙幅の都合により出土古墳の引用文献を一部省略。

写真1：河野英範氏の提供

図11：古墳・横穴墓・近世往還の位置は、国土交通省中国地方整備局・国土交通省国土地理院2001、「マップonしまね」島根県統合型GIS)、文化財総覧WebGIS（奈良文化財研究所）に典拠。作図協力：渡邊真二氏

図12：大谷1998・新納1983・和田2018より転載